

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊山麓

中津川昔話集 (上)

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊山麓

中津川昔話集
(上)

編 武 田 正

飯豊山麓 中津川昔話集 (上)

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
古屋の漏	古屋の漏	猿蟹合戦	猿蟹合戦	猿と蛙と寄合餅	猿と蛙の寄合餅	猿と蛙の寄合餅	猫と燕	トビの紺屋	ツクレンヨシ	テデッポッポ	オタタカ鳥	オタタカ鳥
28	27	24	18	16	12	10	9	8	8	7	6	5
25	24	23	22	21	20	19	18		17	16	15	14
広河原の猫股	鬼むかし	食わず女房	食わず女房	食わず女房	越後の魚屋 いさば	鯖売りサブ	鯖売り三吉		越後のいさば売り	三枚のお札	三枚のお札	古屋の漏
					― 牛方と山姥 ―	― 牛方と山姥 ―	― 牛方と山姥 ―					
53	52	51	49	48	46	43	41	39		35	31	30

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
瓜姫子と天邪鬼	桃太郎	桃太郎	桃太郎	天人女房	鶴女房	魚女房	魚女房	鮭のよ女房	蛙女房	蛇髻	猿髻	猿髻	文福茶釜	細越の法印と狐	空寺の怪

103	99	97	92	91	89	86	85	82	78	75	71	64	59	59	54
			53	52	51	50	49	48		47	46	45	44	43	42
	あとがき		お糸唐糸	オサイとヨウジ — お糸唐糸 —	糖福と米福	糖福と米福	糖福と米福	糖福と米福	— とつくひつく —	おぶさろうの化物	さとりのお化け	炭焼藤太	瓜姫子と天邪鬼	瓜姫子と天邪鬼	瓜姫子と天邪鬼
	145		143	139	137	132	128	121	119		118	118	113	109	106

凡 例

1 テープレコーダーによって収録したものをそのまま表記したものである。しかし、表記上、二・三訂正したものがある。

2 「そして」など一部文章上重複したものは、はぶいたものがあるが、話者の語りを尊重した。

3 昔話の配列は関敬吾氏「日本昔話集成」によった。

4 昔話の表題は話者の意見によったが、中には地域の慣例によったものもある。

5 中津川地区の話者の分を集めたものであるが、地域的には水没地区に調査がかたよった。

1 オタタカ鳥

むかしあつたけど。

兄弟で、弟がやつぱり山さ行つて、トコロ掘つてきて、ゆでで、兄さんが食べて残したおいたな、兄あ帰つてきて、

「こがえに、おれのとこまで、ええどこ残しておく、弟がなんぼかうまいとこ食つたべ」

て、そして弟の腹さいて見たど。そしたらナガクビの細いところばり食つてだ。

「ほんじゃ、おれ、悪いことした弟の申しわけに、八千八声なかなね、一日に」
オトオトコイシ、オトオトコイシて…。

そして、餌とつて食うひまもなくて、モズは木の股さ、いろいろなもの取つて引っかけて置くのあるもんだであ、こいつあオタタカ鳥、声数喋んなねくて、餌とつて食うひまもなくて、そいつ取つて食うな、掛けで呉れつど。

(小坂 男鹿てつの)

2 オタタカ鳥

兄んちやが目見えなくなつて、その弟が貞心なもんで、うまいものに、うまいもの、兄んちやに食^かせんのかな。そしたれば、

「おれにさえもこんなうまいもの食せるもの、弟などなんぼか食つてんべ」
て殺したごんだど。そして殺してみたところが、さっぱりうまいものなどあ食つていねがつた。

「おれにばかりうまいもの食せて呉つじやなてあつた」

その罰ではあ、オタタカ鳥、「オンチョンかけたか、オタタカチョウ」て、八千八声鳴かねじど、御飯食んね。高いどこにばりいる鳥でな、決した下さ落ちて来ね鳥で、何時のこまにモノ食うもんだか、モノ食う隙などないように鳴いてる。口の脇から血出して鳴いてる。

(佃 すす)

3 テデッポッポ

おっかが死んだとき、

「おれどこ、川端さ埋めないで呉ろ」

て、死んだどこだっけな。んだげんどテデッポッポは川端さ埋めたごんだどな。

テデッポッポ

おっか死んだ

チチ飲みたい

川さ流れた

て、今でも鳴いでつど。

(大石きみよ)

4 ツクレンヨシ

ツクレンヨシという蟬は、明神の木切った木っ端が蟬になったので、ツクレンヨシは明神さまのところにしかない。

(男鹿てつの)

5 トビの紺屋

朝早く、ニシン一束さげて出はったど。そしたらカラスあ出てきて、

「カッタガー、カッタガー」

て言うたど。そしたら、「ヒロター」て、トビは染屋始めたわけだ。染屋始めたら、カラスあ染めてもらいに行ったそうだ。そしたら一枚黒に染めてしまったど。カラスの体。そうすつど、カラスあ怒って、自分がええ紋付きなど染めて体さ着

て、色も美しい茶色に染めて、おれには、こがえな一枚黒に染めて呉っじゃて、カラスあ怒って、それで今でも、トビあ出きつど、カラスあ寄つてたかつて攻めんなだど。

（男鹿てつの）

6 猫 と 燕

お釈迦さまのお涅槃の図に、そこさ猫と燕は入んねなだな。

そいつは、燕は化粧してて、体美しくして、しゃれて行つたから、嵌めらんね。

猫は、ネズミがお見舞いに行くときに、そんでき、ネズミば取つたそうだ。それでまず、お見舞いに行くどこ取つたから、猫ははめらんねんだど。

（男鹿てつの）

7 猿と蛙さる と かわの寄合餅

蛙と猿あいてな、餅食いたくなつたがらて、相談したごんだつけ。そしてこんど、何処でか餅搗き始めたようだ。井戸さ入つて、蛙、赤ん坊の泣き真似すつどみんな来くべえから、そんでき背負い出すべて相談して、どこそこで餅搗いっだがらて、蛙あ井戸の中さ落ちでつて、おぼこの泣く真似したんだ。

「それ、みんな、さあさあ井戸さおぼこあ落ちた」

て言うてるうちに、猿あ臼がらみ背負つて、うしろの山さ登つて行つたごんだけど。そして蛙あ後からペタンと跳ねては、喉へコへコ、ペタンと跳ねては、喉へコへコのぼつて行つたごんだけど。そして行つたれば、猿はとづくに登つていて、待ちだんだけど。

「いやいや、やつと登つて来た」
なて。

「蛙、蛙、こつから臼まくつて、早く着いた人は、食うことしねか」

「おれあ、嫌^やんだ。のろくてやっと登って来たんだから、臼さなの追つか付かんねし、嫌んだ」

て言うたつたげんど、猿あ聞かねで、

「まくつてやんべ」

て、ガランガランまくつてやったど。そして蛙はペタンと跳ねでは喉へコへコ、ペタンと跳ねては喉へコへコと降で行ったれば、木の枝さ餅引つかかっついて、一生懸命で掘っては食い、掘っては食いしたれば、猿あ下から、ホホホホ、ホホと登ってきて、

「さつぱり臼さなど、喰つついていねけ」

「おみなどいっぱい食って来たなだべ」

「さつぱり、空^{から}で喰付いていねけ、ちいと呉っだけねが」

て言うもんだから、中の方の熱いどこ取って、猿の尻さ、ピターツと……。

「いや、熱い熱い、熱い」

て、はがして食って、

「いまちいと呉んねが」

て言うもんだから、また中の方の熱いどこはがして、別の尻さぶつつけて、

「熱い、熱い」て、はがして喰ったげんど、それから猿の尻ざあ、それから赤くなつたんだど。

(大石きよみ)

8 猿と蛙の寄合田

このようなどきに、蛙びつせと猿あいたけど。そして猿あ空のええどき、

「蛙もさ、蛙もさ、何としてやった」「何もしてない」

「今日は空はええし、おらええこと味付けたから、相談に来たどこだ」

「何でもござる」

「文右エ門であした秋振舞いすっじから、秋振舞いで餅搗くというから、そんど

き、おぼこあっぱいいたから、蛙あ清水の中さ入ってはあ、赤子の真似して、おぼこの真似して泣く」

て。

「そうすつど、おれあそんな時、家の人あ大騒ぎして、それあおぼこあ清水さ落ちたなて、みな出はって行んから、そんな時、臼がらみ背負つて、猿の稲場さ上つていって、餅撒きすつから拾い勝ちし申すべ」

て言うたど。

「それあええことだ」

て、そうして相談して、次の日、文右エ門では秋振舞いで人招んで、餅搗き始めたど。そして餅あ練れた頃になつたど。行つてはあその下の清水さ入って、オギヤオギヤ、オギヤオギヤつて、おぼこの真似する。そうすつど。

「おらえに、かあちゃ、おぼこがいる。早く、おぼこあ落ちてる。清水さ落ちたから、早く上げて呉んなね」

て、みな出はって行くどはあ、女衆も何もみな魂消て出はって行くど、そんな時

そこ戸開けておくんだから、白背負つてはあ、うしろ山さ、ホイホイて上がつて行つたど。そしてはあ、高いどこから、蛙びつきはのろいんだから、ピタンピタンと行つて、そんな時、猿あ、

「蛙もさ、蛙もさ、ここから転ばしてやつから、拾い勝、し申すべ」
て、

「おれあ、のろいから、ほに、みな、御身おみは早いんだし、おれあのろいから、そんなことしないで、分けて食ねが」

て言うけずあ、

「ええから、拾い勝ちすつから」

て言うもんで、高い山から白あコロンコロン、コロンコロンとまくしてやった。

ホイホイ、ホイホイなて、猿あ白の中さ喰付いて降つて来る。蛙はピタンピタンと来ているうちに、餅あつて、ツツジかぶつて、そこさ餅みな引掛つて、猿の食うのは臼さ、ちいと喰付いっだきりだつたど。そうすつど、猿は途中で落ちてしまつたんだから、ホイホイて上がつて来て、

「蛙もさ、蛙もさ、ええごなんだ。そがえに餅ある、ちいと呉つでくろ」

「おれあ、のろくてやつとここまできて、食^くてだし、御身あ臼と一つに行つたもの、なんぼかたくさん食つて来たべから、呉れらんね」

て言うたら、

「そんなこと言ねで、ちいと呉つでくろ」

「呉れらんね」

て言うたら、「ちいと呉ろ、ちいと呉ろ」て言うど、蛙は餅の中の熱いどこ、したぎつて、「それ」て言うど、猿の顔面^{つら}さぶつつけたど。そうすつど、顔面うち火傷^{やけど}して、「アチアチ」て言うど、餅ぶつつけらつで、猿の顔面ざあ焼けて真赤になつたんだど。むかしとーびつたり。

(山口すえの)

9 猿と蛙の寄合餅

猿と蛙^{びつき} あ、集まっていたどこさ、どっかの家で餅搗き始めたど。蛙^{びつき} あ食いだくて、

「何とかして食いだいから…」

て、二人で相談してたば、その蛙あ、

「池の中さ入って、おぼこの泣き真似しろ」

て、猿が教えたど。そうすつど、蛙あ池さ入って、赤子の泣き真似したじだな。

オギアオギアて。そうすつじど、家の人あ魂消て、子どもあ池さ入ったちゅうわ
けで、皆飛び出はって行つた。そうすつど、その猿がその留守に臼を背負つて、
そして出掛けたなだど。猿あ背負つて行く、蛙は出はって来る。家の人あ大騒ぎ
して、してはあ、猿あ臼を背負つて、山さエンコエンコと登つてしまった。そう
すつど、蛙が後から、ピタリピタリと登つて行つて、分けるて言うたげんども、
猿あ欲ふかいもんだから、分けないで、

「一番高い山から転がして行つて、一番と付いて行つた人が勝ちだ」

て言うたつて。そしてその山から登つて行つて転がしたつて。して転がして行くと、その猿が、そさ喰付いてはあ、下まで走つて行つたど。そうすつど走つて行つて見たげんども、その臼ささつぱり入つていねがつたつて、蛙は下からピタンと登つて行つたらば、途中さその餅がいっぱい引掛つていて、して、蛙ぱり食つていたどころさ、猿来たわけだ。猿は「少し分けてけろ」て言うたげんども、「分けらんね」て言うたつて。

「あの、誰でも先に拾つた人が勝ちだから、分けらんね」

て、それでも分ける分けるて言うもんだから、聞かなくて、蛙がごしやえで、猿のどさぶつつけて、顔さぶつつけてはあ、今でも猿の顔、そんじえ赤くなつたごんだ。とーぴつたり。

(高橋うめの)

10 猿 蟹 合 戦

むかしあつたどな。『オット』

あるところに、一匹の親蟹が出てよ、そしてモソリモソリと歩あるつているど、そういうところに、オニギリが落ちていて、

「いやいや、これはええ。オニギリ拾った。子蟹に食べらせるにええなあ」

て思つて拾つていたところに、猿が釣竿かつねて向いの山から、ホイホイと来たんだ。『オット』

そして、

「蟹さん、そのオニギリとこの柿の種子——柿の種子持たつてきて——と取換えっこしないか」

「駄目だ、駄目だ、これは子蟹に食べらせんなねから、駄目だ」

「いや、こりや蟹さん、この柿の種子というものは植えれば、だんだん大きくなつて、柿のうまい実がなるもんだから、これ、取換えね馬鹿はないもんだ。取換え

ろ」

ていうたど。『オット』

そして取換えて、蟹は正直なもんだから、その柿の種子をドツカドツカと鋏で掘つてよ、そして埋めて、柄杓で、「オエザラ、ハサミキル、オエザラ、ハサミキル」て言わつて、だんだん大きな木になって、そうして、大木になって、柿がいっぱいになったんだど。そして蟹は木登りさんねもんだから、

「うまそうな柿も実^なったげんど」

て、いたどこさ、また猿が釣竿かっいで、ホイホイ、

「蟹さん、さあ大変だ。おれもいでくれんべ」

「んじゃ、頼む」

そして、ツルツル、ツルツルと登つて、猿はうまそうなのを、ポイともいで、カリカリ、カリカリ。ポイともいではカリカリ、カリカリと食つたど。『オット』

おいしそうに食べて、

「おいしそうだ、おれにも一つ呉んねえか。お前ばり食つてねえで…」

「ほうか」

青いどこのような、渋いような、ポキツとほいで、目糞、鼻糞、トロトロつてして、おまけに尻をぐいとぬぐって、「そら来た」て投^ぶつつけたど。『オツト』そうすつど、柿ぶつつけらつじえ、転んだわけだ。「よし、敵討ちしてくれましよう」と思つて、猿が籠さ一つ背負つて降つて来るどこ、すかさずツルツル、ツルツル降りて来つどこ、まずハサミ出して、尻尾、チョキンと切つたど。

猿は、「この敵は、必ず晩げ夜討ちに来つから、憶えていろ」て、こういう風に
して行がつて、蟹は、

「さあ、大変だ、猿に敵討ちに来られるちうことは大変だ。こんなことになった、
どうしたらええか」

て思つていたどこさ、臼が来たどな。ゴロンゴロン、ゴロンと来て、

「蟹、蟹、なにしてお前は泣いっだ」

「こうこうしたこと、今夜、猿が夜討ちに来るといふこと、猿にはおれはかな
わないもんだ、どうしたらええかと思つて、思案にくれて泣いっだ」

「よしよし、おれ手伝って、敵討ってくれっから、決して心配することない」

そうしているうちに、針が布団縫い針が、チクモク、チクモクと来て、

「蟹、蟹、何して泣ிட்ட」

「こうこうしたわけで、泣ிட்ட」

「んじゃ、おれも敵討ち、助けっからな」

そうしているうちに、蜂がブンブン、ブンブンと飛んで来たど。『オット』

そのわけ聞いて、「それなら、おれも手伝う」。そうしているうちに、突っぱり棒も来た。ドシリドシリ、ドシリと、マッタン棒が来た。そのわけを聞いて、大變ふんがいして、

「それなら、おれも手伝う」

いよいよ相談する。そこに栗もくる。そうしているうちに来たのは、牛の糞もビタカタ、ビタカタて来たど。そのわけ聞いて、

「んじゃ、おれも手伝ってやる」

「どうして征伐するか」

て、相談になって、臼はまず上のお天井に隠れる。布団針は布団に隠つて。蜂は蜂のように窓のところにいる。蛇は味噌の中ほどにいる。栗は火所ほどさ入る、というような段取りでいたどさ、案の定、時刻見計らつて、猿は来る。

「蟹、蟹、いたか」

て言うど、蟹は水甕さ入つて、ちゃんと隠つでいるうちに、モソモソモソと、「こんなところに、火も焚かねでいた。蟹。火でも焚いて……」。

て、囲炉裡かましているうちに、火あパサーツとはじけて、猿の顔全部火傷する。

「熱い、熱い、こんなことでは仕様ない。まずもつて明るいところさ行つて見なね」

て思つて、窓の傍さ行くど、蜂あブンブン、ブンブンて来てチクツて刺す。

「いやいや、痛い痛い、こんないたいことはない。こんな時に味噌を付けつどええから、味噌でもつけましよう」

て、味噌コガさ手つかむど、そこさ蛇あいて、チクツと刺す。

「いや、いたい、いたい」

て、手振って、こんどは、

「こげなひどいときは、寝て一休み休むべ、蟹はどこさかぐつでいたべ、何だか出はって来ない」

て思つて布団さ入つど、針にチクチクチクと刺さつて、

「いや、いたいいたい、こりや何ごとなんだか、こがえなどに居られるもんでない」

と思つて、飛出はって行くじど、糞、ビタカタていうのさ、つんのめつて転んで行く。転んで行くどこさ、マツタブリは、

「そら来た。どっこい」

て、猿を追いつめて、その臼がゴロゴロ、ドスンとぶつつぶして、敵とらつたどこだど。とーびつたり釜の蓋、さんすけ。

(山口ふみ)

11 猿 蟹 合 戦

あるところに猿と蟹あいて、してニギリメシ、蟹あ拾つて食べていたど。猿あ山から降^おちてきて、

「柿の種子と取りかえろ」

て。そしたら蟹あだまさつではあ、「取換えね」て言つたげんども、取換えろて言わつてなあ、

「こいつ植えつど、じきになつから」

そしてヤキメシやつてはあ、柿の種子を猿からもらつて来て、そしてお庭さ植えて、一生懸命で水かけて、おがした。そしたら大きくなつて、実^なつたわけだ。

「ならざらハサミ切る」とか言うて、大きくなって、そうすつどまた猿あ山から降りてきて、柿実^なつたもんだから、

「もいであれつから」

蟹は登らんねわけだ。登つてみつどツルツルと落ちてきて、

「ほんじゃ、おれ、もいで呉れっから…」

て、そして蟹あ、

「猿あ木登り上手だから」

て、猿あ上がって行つて、もいでキザワシであつたなだなあ、渋味のないの。

そしてその自分が色のついたうまいとこばり食つて、蟹は、

「一つ落して呉ろ」

て言うど、遅色ついたとこの渋味、いいあんばい取んねとこなの呉つた。そしてしまいには蟹とこさ柿ぶつつけて、自分がいっぱいもいで持^たつて逃げて行つたと。そして蟹は甲羅痛めてはあ、泣いていたどこさ、いろいろな来たわけだ。

「なして泣いてる」

て、臼に蜂に栗、そして昆布が来て、「なして泣いてる」て言うたらば、

「こういうわけで、猿に甲羅さ柿ぶつつけらつで、痛くて泣いっだ」

「そんじゃ、晩げ夜討ちしろ」

て、猿の家さ行つてみたら、留守であつたそうだ。そうすつどみな、てんでん

12 古屋の漏

むかしあつたけど。

このようなどこに、じじとばばいだっけど。じじとばば二人つきりで、大きな家さ入っていたど。

そして、夜、その寝話に、

「この山の中に何にも恐^おつかないのはないげんども、古屋の漏一番恐^おつかないと、そう言つて寝話したけど。そうすつど、山の中から狼降^おちてきて、何にも食うものがないもんだから、家さ入つて一噛みにしてくれましようと思つて、入つてきて、そして軒場で聞いっただれば、寝話に聞くじど、

「世の中には、何にも恐^おつかないのないげんども、古屋の漏あ、一番恐^おつかな
い」

て、話したど。そしてその狼あ聞いて、

「おれは、山の中におれほど恐ろしいものないと思つていたげんども、おれより

恐ろしいもの居たかなあ」

て聞いたって、

「古屋の漏て、なじなもんだべ」

て聞いたで。そして恐つかなくて逃げて行つたて。そして、

「世の中には、おれより恐つかないものいるもんだから」

尻かえちやにして、逃げてしまったけど。とーびったり。

(鈴木ひろ)

13 古屋の漏

あるところに、じつちやとばつちや暮していたど。そして夜、寝物語りしたそ
うだ。雨は降ってきて、あっちこっち、そこは漏^むってきたわけだな。

そしてそのじつちやとばつちやは馬を立てて、仔とつていたど。その仔盗みた

くて、馬喰、廊下にしゃがんでいたけど。そうすつどじつちやとぼちちやの寝物語り聞いた風だな。

「いやいや、なあ、世の中には何も恐つかないものないげんども、古屋の漏くらい恐くないものは世の中にない」

て、じつちやとぼちちや、年取ったから、修繕すんにひどかったべちや、くどいたど。そうすつど、馬喰あ聞いて、

「はてな、古屋の漏なて、なじよな獣だべな、おれもよつぽど騒いだげんど、見たことない」

そうすつど、馬喰も古屋の漏おっかなくなつた風だ。そしてしきりに雨あ降つてきて、表さ出て、雨のどこ、じつちや、ふたぐ積りで出たべな、そしたら、馬喰は魂消て、

「さあ、こりや古屋の漏あ出てきた」

そうしてはあ、こんどは馬盗みやめて逃げだど。そうすつどこんどは、

「それ、泥棒だ」

て言うごんで、じっちゃとばっちゃ追かけて、着物おさえたど。さあ馬喰も古屋の漏につかまっじやと思つてはあ、急いで逃げる気だど。そして見たところあじっちゃとばっちゃであつたど。とーびつたり。

(男鹿てつの)

14 古屋の漏

むかし、ここのようなどこに大きな家あつて、じじとばば暮したけど。そして狼がぐるりさ來つたなど。そしてじじとばばの寝ての寝話に、

「そのなあ、じじ、じじ、恐つかないものは、何一番恐つかないべなあ」
てよ。

「狼ていうの恐つかないもんだ。人として食うもんだから、恐つかないもんだぜ」
「んだか。んだげんど、古屋の漏ていうのも恐つかないぜ、古屋の漏の方が恐つ

かないでないべかな、じじ」

て、寝話だけど。そうすつじど、狼が古屋の漏じや、何ものだかと思つてな。恐つかなくてはあ、その話聞いてはあ、まず、この家さ入つて悪れ^{わる}こととして呉れましようと思つて来ていたべげんども、ガラガラ逃げて行つた。

(佃 すす)

15 三枚のお札

あるところに、和尚さんがいて、弟子を頼んでおいたな、そいつあ、

「山さ、ワラビ採りに行きたい」

「んだげんども、あその山は危険な山だからやらんね」

て、和尚さまは言つたげんども、聞かねで行つたそうだ。そして行つてみたら、姉さまいたけど。そして姉さまと知り合いになつたわけだな。そして、

「晚げ、おらどき泊るように来て呉ろ」

て言わっじゃげんども、

「和尚さまに聞いて、伺って来ないと泊らんねがら」

て、そして寺さ帰って来たそうだ。そして、

「こういうことあったから、和尚さまに手間もらって行つて来たい」

て。和尚さまは、

「それは人間でもないから、何かの化けたのだから、やらんね」

て言うたげんども、なかなか小僧さんは聞かねど。

「そんじやら、この札呉つでやつから、山でる札と、火あ出る札と、川出る札だ」

そしてそいつ三枚もらって行つて泊った風だな。そして泊っているうちに、夜

雨降ってきて、そしてこの屋根から雨だれ垂つたそうだ。

タンタン狸の顔面を見ろ

どかて、雨だれ言うたら、それをやっぱり考えたそうだ。小僧さんは、タンタン、タンタンと垂つたのを、タンタン狸の顔面を見ろ、やっぱり眠ってやったべ。

狸あ、それから小僧さん、特にあれしてみたら、狸であつた。そしてはあ、魂消て起きて、逃げんべえと思つたら、

「どこさ行く小僧、おれあ食べる勘定で連れて来た。んだげんど、今逃げらつては困る」

て、抑えられつどこだつたど。そして、

「逃げて行くのでない。カワヤさ行くのだから…」

て、そうして嘘語つて出はつたわけだ。

「そんじゃ、綱つけてやる」

て、綱付けてやった。そしてカワヤの柱さ綱つけて、小僧あ逃げて行つた。なんぼおもつても来ないがんべな。そうすつど、後から追かけたわけだ。いまちいとで追つつかれそうになつた。まず「山出ろ」て、その札投げたら、ちようど小僧の裏さ大きな山出て、そしてはあ、そこでまた小僧は先跳ねたし、後から山出て行かんねくて、手間とつてだ。そしてまた追つかれそうになつた。そしたらこんど、「火あ出る」て投げた札は火になつて山一面に火になつて、そこでまたまご

ついたわけだ。そして小僧あわらわら走っていたげんど、また追つかれそうになった。そうすつど、こんど、「川出ろ」て、その三枚目の札投げたど。そうすつと大きな川、どんどんと出て、こんどはまず川だから、漕がんねわけだな、狸。あつちさのぼり、上さ登ったり下さ下ったりして歩いているうちに、小僧は寺さ着いて、そして、

「和尚さま、和尚さま、今食れつどこだから、化物に食れつどこだから戸を開けてもらいたい」

て、そしたら、

「お前は、おれの言うこと聞かねで行ったから、戸開けらんね」
て、和尚さま、

「いや、そうしないで、どうか助けておくやい、今おさえられつどこだ」

そしてやつと、その川のぐるりに狸がいるうちに、和尚さまどこに行つて、戸開けて生命助かったど。んだから小さい人は大きい人の言うこと聞かなねもんだ。とーびつたり。

16 三枚のお札

ある寺に、小僧がいでやったど。そしてお盆になって、

「村の衆、五六人とお前も行って、桔梗とコガネ取って来いよ」

「はい」

「それなら、万一のことあるから、お前に尊ととさい札を三枚やるから、これ持つて、いざ困ったと思うとき、何でもお前の出したいもの、口で言えば必ず出るから、これ尊ととさい札三枚呉れつから、これを放さないで持つて行げよ」

て、こう言わつて、みんな友だちと、野くれ山くれと桔梗取りに行ったら、だんだん山奥、山奥と、足まかせて行ったら、もう友だちにはぐれてはあ、とんでもないどこさ行ってしまつて、さあ大変だと思つたら、日も落ちて暗くなった。

さあ大変だ。お寺に戻らんない。今夜どこさか泊るほかない。どつか明るいどこないかなあと思つていたら、向うの方に、ポカリポカリ灯あかしがある。はてはてあそこ
に灯あつから、あそこさ行つて宿を頼む他ないべなと思つて、だんだん行つたら、一軒の小屋ある。

「今晚は、今晚は」

て言うたら、「誰だんじゃ」。

「こういうことで、花採りに来てあつたげんど、友だちと離れてはあ、お寺さ帰るようになつたから、今夜一晩げ泊めておくやれ」

「んじゃら、入れ。泊めてやるから」

そして御飯を御馳走になつたら、

「小僧、おれに抱かつて寝ろ」「はい」て、抱かつて寝て、だんだんおばあさんのどこ撫でてみたらば、毛むくちやらな…。

「はて、これは鬼婆かな」

て思つたら、身振りして、

「さあ大変だ、鬼に食わつじや大変だ。これは逃げる他ない。ばばちや、ばばちや」
「なんだ」

「おしっこが出る。ウシコあ出てきた」

「ほんじやら行つてこい、にしやは氣あついたでないか、にしやは逃げつど悪いから、細紐つけてやる」

腰紐、ぎちつとつけらつて、腰紐持^たつて便所さ行つて、便所の柱さ紐ぎちつと結つけて、「小僧出たか」「はい、まだ」「小僧出たか」「はい、まだ」「小僧」「まだ」「まだか」て、鬼は引っぱつたらば、柱からみ抜けて行つた。

「さあ、小僧あ逃げた、あのうまそうな小僧、逃がしてはいらんね」

どンドン、どンドン追かけて来て、小僧、いま一つかみで抑えられそうになつた。さあ大変だ。ああ和尚さまにもらつた、あの尊^ととさい札、

「よし、バラ藪^{やら}出る」

て、うしろさ投げてやつたどこ、そうしたら大バラ藪^{やら}出た。

「こんなもの出たて何のその、負けていられるもんでない」

こう漕ぎ上がつて行くと、また小僧は一生懸命になつて跳ねて行くと、また追かけてくる。こんどは後見て、札持つて、

「大川出ろ」

て投げたれば、どんどん、どんどんという大川出る。

「こげな川に恐れていない」

ガホガホ、ガホガホで、みな漕いでまた追いつきそうになつたど。さあ大変だと思つて、「火の山出ろ」で、うしろさ投げたれば、どんどん、どんどん火の山出る。火くぐつて、火の山くぐつて行くうちに、和尚さまさ行つたどこよ。寺さやつと行つて、

「和尚さま、和尚さま、早く門あけて呉ろ、和尚さま」

そうすつど、和尚さま、ゆつくり、

「まず、起きて…」「早く早く」「…衣を着て」「大変だ、和尚さま、和尚さま」「まず、足袋をはいて」「早く早く、鬼あ来る」「ようし、まず門を開けてやる」
ようやく開けてもらつて、

「ほら、ここにヨモギと菖蒲あつから、この中さ隠つてろ」

菖蒲とヨモギの中さ隠つていたそうだ。鬼あ来て、小僧取つて食うべと思つて、
「さてさて、くやしい。残念だ」ヨモギと菖蒲というものは、五月にそのために
立てるもんだと。とーびつたり

(山口ふみ)

17 越後のいさば売り — 牛方と山姥 —

魚売りが来て、小国さ越える峠ある。小国の方から入ってきて、峠を越えて中
津川さ入ってきて、途中で鬼婆に掛からつたど。そして持つて来た魚を投げてやつ
て、魚あるうちあムシヤムシヤいっけんども、そいつ食い上げつどまた追いか
けてきて、また来て皆食つてしまつてなくなつた。そして逃げてきて、そんでも追
て来るもんだから、川端の柳の木さ這い上つて、木の細いところまで登つて陰つ

でだなに、鬼婆は木さ登つて来つど、うしろから、「いさばや待て」て言うもんで、なんぼも追いつめらつで、ばば登つて来て、おさえらつでしまったもんだから、ぺこつとしなつど、柳の木だから、ポクンと折れて川の中さ落ちてしまつたど。

そうすつど、「ひどいいさばやだ」ていうもんで、着物ひきずりひきずり逃げて行つたど。いさばやも川さ流つたな、やつと這い上^上つて、腹も空きたし、家ば尋ねて行つたば、鬼婆の家だつたど。鬼婆の娘あいた、そいつに隠してもらつたど。

鬼婆は、「寒い寒い」て、「酒飲まねど分んねから、姫、酒出せ」なて鬼婆、酒飲んで、「餅焙れ」なて、餅焙つて食つて、酒飲んで酔えではあ、餅も腹いっぱい食つて、

「姫、おれあ眠る、はて、今夜は石の唐戸さ入つた方がええか、木の唐戸さ入つた方がええか」

なて。娘は、

「石の唐戸よりは木の唐戸ええんだ、ばんさ」

て、木の唐戸さ入つて眠た。そしたら雷みたいなイビキかいて、木の唐戸で眠

た。そさ、いさばや、こんど出はつてきて、いさばや、娘に御馳走になつてええ
ぐなつて、

「ばば、ひどいばばだから、お湯かけて煮殺してやつから、お湯沸かせ」

て言うもんで、お湯を沸かさせて、木の唐戸だから、キリで孔あけてはあ、そつ
からお湯つぎ込んでやつてはあ、つい鬼婆殺して、そして姫をおかたにしてはあ、
歸りに成功したけど。どーびん。

(男鹿 秀)

18 鯖売り三吉 — 牛方と山姥 —

鯖売り三吉が鯖売つて歸りに、山で何か化物に追つかけらつてな、追つつかれ
そうになつど、鯖を一匹投^ぶつてやつて、それをムシヤムシヤ食つてうちに、逃
げ逃げして、やつと逃げてきて、ある一軒家に逃げ込んだど。そして天井さ上がつ

て隠つでるうちに、化物帰つて来て、火焚いて酒のオカンをしたど。そしてコックリコックリ居眠りしてうちに、屋根のオノガラ抜いて、それをチュウチュウと吸ってしまったど。そのうちに目覺まして、

「火の神さま、あがりやったべ」

どかて。こんど仕方がないから、餅焙つて食うかなて、餅焙つたど。プウとふぐっじや頃ねらつて、またカヤ棒でそと取つては食つていだっけど。そして、
「何もないから、寝つことにすつか」

て言うことで、

「石の唐戸にすつか、木の唐戸にすつか」

て言うど、木の唐戸さ寝たこんだかな、そしてるうちに、夜中にそと起きでつて、錠をしめて、キリで穴をあけて、お湯を入つて殺したど。とーびつたり。

(井上元一)

19 鯖売りサブ ― 牛方と山姥 ―

新潟から、サブていう魚屋、魚いっぱい背負^{いさ}つてきて、そして峠さ行つたれば、ガサガサ、ガサガサて化物出はつて来たど。

「魚屋、魚屋、魚呉んねえか」

て言うこんだな。そして、

「取つて食うぞ」

なて言うので、「ホラ」てぶん投^なげてはあ、一生懸命走つて行くの、また追掛け、「魚屋、魚呉ろ」て言うもんだから、「ほら」て言うて、一生懸命行くじど、また追かけて来たもんだから、箱がらみ呉つではあ、わらわら逃げたげんど、追ついで来たんだし、仕様ないから、こんど高い川端の木の高いどさ登つて見つたら、「取つて食うぞ」て追っかけて来たもんだどな。そしてはあ、仕様ないんだから、魚屋、はね落ちて、化物も川さ飛び落つたど。そうしてずうつと魚屋先に行つて、向うの方に灯あるもんだから、そこさ行つて、

「今夜、泊めて呉^くんねえか」

て言うたげんども、誰もいねもんだから、大天井さあがつていたようだけな。そしたれば化物が来て、

「いやいや、今日は馬鹿な目に合った。ほんじゃまず、火でも焚いで酒でもオカシして飲むべ」

て、そうして酒のオカンしたらば、天井から、その魚屋、葭^{よし}の棒出して、ツツウと飲んで、したらば化物、目覚まして、

「いやいや、火の神さま飲んだ、ほんでは餅でも焙^かつて食^かんなね、こりや」

どて、そして餅焙^{たが}りして、また背中焙^{たが}つたもんだから、魚屋、また葭棒でみな二階の上さ持^{たが}き上げ、餅食^{たが}つて、

「いやいや、こりや、みな火の神さまに食^かつじやもんだ。寝^かんべ。どこさ寝たらええんだが、二階さ寝たらええんだか」

て言うもんだから、魚屋、二階さ来られつど悪^われから、チチ、チチて何か音立てらせだば、二階さ行くんだら、梯子さ火でも点^ついたんだか、行かんねから、

「唐戸さでも寝んべ」

て、唐戸さ寝た音すつから、そおつと降つできて、唐戸さ外から錠かけて、そしてお湯をどんどん、どんどんと沸かして、その唐戸さ、キリキリ、キリキリとキリで孔あけて、

「なんだ、今夜、キリギリスあ鳴くな」

なて、中で音あすつけずけ、そしてそこ、じゃあじゃあとお湯かけて、殺したもんだけど。

そして次の日開けてみたらば、大した大きなムジナ死んでだけど。ムジナも年取つど化けるもんだど。とーびったり。

（大石きみよ）

20 越後の魚屋 いさば — 牛方と山姥 —

むかし越後からきた魚屋、やっぱり道に迷ったど。そして行つてみたところが、暗くなつて、小さい小屋があつたから、まず、灯りをたよつて行つて、「泊めてもらいたい」て言うたら、

「越後から来た魚屋だげんども、道に迷つて帰るようないから、泊めてもらいたい」

て言うたら、

「おれは山に住んでいる婆さまだげんども、よからば泊れ」

て言わつて、やっぱり戸などないから、こも菰下げていたどこ開けてみたら、白髪なばさまであつたそうど。そして、

「おれは一人ものだげんども、よからば泊れ」

て。魚屋も恐つかないもんだから、逃げる氣持になつたごんだな。そうすつど、

「魚屋のこんでは、魚一匹呉ろ」

そして恐つかなくて、魚屋、投^ふつてやつてな。逃げたど。そうすつど、
「一匹^ほばりもらったつて、片方の頬^ほったぶしかうまくないから、こっちの頬^ほった
ぶ、うまくするように欲しい」

て、ばさまに言わつて、いま一匹投^ふげてはあ、わらわら逃げてきたど。そして
きて、そんでも追付かれそうになつて、こういう大きな川あつどこに木あつて、
その木の上さあがつて、そしてばさまがらんねがつたど。川から石を拾^つつてき
て、ずつと石を積^つんで、そして高くして、魚屋さ手突^つ出したど。そうすつど魚屋
恐^{おそ}つかないもんだから、木ゆさゆさ揺^ゆつたど。そうすつど石あくすつて、わらわ
らと川の中さ入^いつてしまつたど。そしたら川の中さ入^いつて石の下になつて、その
化物は死んだわけだべ。そうすつど荒い魚屋であつたべ、その小屋さもどつたも
んだずも。

「そかなものいたどこだらば、何か宝物あんべ」

て、その小屋探^たしたそうだ。そうしたら、お金からさまさまあつたそうだな。
そしてそれ持つて歸^{かへ}つてきたど。ああいうものと賢^{さとし}いものには、かなわね。とー

びったり。

(男鹿てつの)

21 食わず女房

御飯おまの食かないお嫁さん欲かしいて言うたらば、夜遅く来て、

「御飯かの食かないお嫁さん欲かしいて、お家でいやった。おれあ御飯食ないったつてええからお嫁にしてもらいたい」

て、きてあつたそうだ。そしてお嫁にして、何日もいつかもいるに、御飯食ねざあ、不思議だ。これもやつぱり二階の裏から上つて、稼うぎに行つたふりして、かぐつて見つた。そしてたら大きな鍋さ御飯炊いて、そして髪をばらっとほどいて髪かみの頭の真中に穴あつて、そつから皆御飯投げ込んだど。そしてたらこんど気味わるくなつてはあ、いらんねぐなつてはあ、そうすつど見つけらつたてはあ、お嫁

さんが、

「食う気になってお嫁になったな、逃げらつでは困る」

て、追かけらつじやなあ、そんでもいろいろ逃げて、まず食^かんねでしまったどなあ。こういう山の中だから、気付けんかねもんだ。とーびつたり。

(男鹿てつの)

22 食わず女房

むかしあつたけど。

ある雨の降る晩げ、スタスタ、スタスタと来て、そして大變にええオカタいだどこだけな。そして、

「おれどこ、嫁にしておくやい」

て言うごんだから、そいつを、まず嫁にして、いやなんなもんだか、飯^{まんま}のいつ

こと米のいっこと、ちつとさつと米要つことでないけど。おかしいこともあるもんだ、このように米要つことさあないもんだて、その一人者あ二階さ上がって見つたれば、いやまず朝げ、その女、ヤキメシ仰山握って、見つたれば髪をこう上げだれば、そこから大きな口あつたどこ、ヤキメシいっぱい入って、知しやねふりして、

「おれ、ゆんべな、夢見たもんだけな。何なもんなんだか、ヤキメシいっぱい握って、そして頭の中さ入れる者あいた夢見たもんだけな」

て言うど、赤くなり黒くなりして、鬼になつて逃げて行つたけど。やつぱり一人者ざあ馬鹿にされるもんだど。とーびつたり。

(大石きみよ)

23 食わず女房

あんまり慾のふかい人たつたずけど。そいつが、

「飯^{まんま}食ねおかた、欲しい」

て、念願に思つて、ちやうど探しつけたど。そしてもらった嫁が口あなかつたど。ほだから、

「おれの嫁にはふさわしい嫁だ、ええ嫁だ、ええ嫁だ」

て。賞めてみたところが、河童だつたど。夜中に飯^{まんま}つめ込む…。あんまり慾たけるものでないど。

(鈴木ひろ)

24 鬼むかし

三人娘あいて、うしろ三反、前三反、そいつさ水かけて呉れる人あつこんだら、娘三人持ったな、呉れるつて、じじ頼んだところ、そしてええ男になつて、水かけて呉れるつて、鬼が来たど。そして、

「おれの恐つかないのは、菖蒲とヨモギだ」

て言うのを聞いて、鬼から逃が^のつできて、家さたちまち菖蒲とヨモギさしたつてよ。そしてその家の前まで来たげんど、その鬼は菖蒲とヨモギさしたもんだから、入りかねたど。それをきっかけにして、菖蒲とヨモギと五月節句にさすんだど。

(鈴木ひろ)

25 広河原の猫股

猫とおばあさんだけ残して、御祝儀さ招^よつで行ったど。そしておばあさんが、

「猫、猫、退屈でないか」

て言うたれば、そしたれば、

「唄うたつて聞かせっから」

て、猫唄うたつたつて。そして唄うたつたり、手拭かぶつて踊りおどつたつて。

「んだげんども、おばあさん、決して人さ話さないで、おれあそのこと人さ話教えられつど、こさ居らんねから…」

やつぱり、ばばも気味わるいから人さ話したれば、センノウ沢という沢あんのよ、向いに。そこさ行つて猫股になつて、そして一年に一ぺんは猫の鳴声聞かせるど。

(大石きみよ)

26 空寺の怪

白川村の白川寺で言う寺あつこで。そこに、和尚は来るなも来るなも、化物に食つてしまつてはあ、空寺になつていっどこさ、むかしあ雲水坊主ていうの歩つたごんだごで。道心坊なて言うたもんだ。そいつあ来た。

「今夜、一晩げ泊めて呉ろ」

て来たな、そいつ、

「泊めらんねから、ここに、白川寺ていう空寺あつから、そこでよからば、そさ泊れ」

て言うたば、

「ええどこでないどこだ。空寺などさっぱり恐つかないことないから、泊めておくやれ」

て言うて、そこさ泊めたことよ。そうすつど、和尚さま、檀中から米もらつて行つて、飯炊いて食つて、そしてお経読んでいたれば、夜中頃になつど、ガヤガ

ヤという、何か来ると思つて、黙つて聞いっただれば、

「梅林殿、梅林殿、家にござったか」

「おり申した。どなたでござる」

「言うど、こんど、

「東堂の老狐でござる」

「言うけど。」

「さあらば、おいやれ」

「言うど、ミチミチ、ミチミチて行くど、こんどはまたじきに、

「梅林殿、梅林殿、家にござったか」

「おり申した。どなたでござる」

「言うど、こんど、

「西竹の一鶏でござる」

「さあらば、おいやれ」

「言うど、それもミチミチ、ミチミチと仏壇の方さ行くのよ。また来たの、

「梅林殿、梅林殿、家にござったか」

「おり申した。どなたでござる」

「言うど、こんど、」

「南池の大魚でござる」

「さあらば、おいやれ」

「そいつもミチミチ、ミチミチと仏壇さ行つて、またまた、」

「梅林殿、梅林殿、家にござったか」

「おり申した。どなたでござる」

「さあらば、おいやれ」

「言うど、ミチミチ、ミチミチて、仏壇に行つて、こんどみんな集まつて踊り
始まつたんだとはあ、踊りは、」

ザンベツ サクベツ サ克蘭ダー

サクベツソワカニ キンキンキン

コンコンコン

て、本気になつて踊つたずも。みな集まつて。そうすつど、和尚さま道心坊は、「これはしたり、化物ざあ、このごんだ」

て思つて、拂子ほっすを持つて、ほに、フフンマと分けて、そうして仏壇さ行つて拂子バチーッとしたらば、止まつたけど。ピチッと。その踊りは…。そうすつど、「梅林とは、梅の木でこしらえた猿であらう」

て言うたど。そうすつど、ガタンと言うけざあ、猿になつて行つたけどなあ。それから、

「東堂の老狐とは、東のお堂に住んでいる古狐であらう」

て言うたど。そうしたら、コンコンと言うけあ、狐になつて行つたけどはあ。東の方のぼつこれお堂に入つたけど。

「西竹林の一鶏とは、西の竹林に住んでいる盲鶏めっこであらう」
コケコー、ケケコーと言うけあ、行つたど。

「南池の大魚とは南の池に住んでいる鯉であらう」
て言うたば、ゴチャゴチャと言うけあ、南の池の鯉ざあ、そのごんだど。それ

から、

「北山が岳の白骨とは、北の山に埋まってるシャレコーベであろう」

て言うたらば、大きな頭ゴロゴロ、ゴロゴロ。みんなそのようにして、化けたの、道心坊に解がつて、行つてしまつたど。そして後何も来ないから、安態して、和尚さま、お経詠んでいたから、近所の人は、

「また道心坊は食^かつてしまつたべ」

て言うもんで、総代衆は集まつたど。そうすつど、こういうわけであつたて話したれば、

「これはええ、ほんじゃ」

て、みんなに喜ばつてはあ、その住職になつて、一生富貴に暮し申したけど。むかしとーびつたり。

(山口すえの)

27 細越の法印と狐

狐 あええあんばいに眠ったどこ、ホラの貝どか吹いて起したったな。魂消ら
したらば、そしてこんど歸りに、とぶつと暗くなつてはあ、まだ暗くなるはずあ
ないと思つてだら、葬式出て、そうして木の上さあがつて見つたらば、ちようど
その上った木の下さ埋めたごんだけど。そしたれば、その、埋めた棺の中から化
物出てきて、おっかけらっただけど。

(大石きみよ)

28 文 福 茶 釜

あるところに、骨董屋さんいだっけど。そして、骨董さんが遅く歸つて来つ
ときに、野原來っどき、狐がいた。

「狐、狐、なにか珍しいものに化けらんねが」

そしたら、狐、

「化けられる」

「あそこの寺の和尚さまは古いもの好きだから、何か茶釜の古いものに化けらんねか」

「化けられる」

そして狐は陰さ行つて、化けて来たら、南部釜の古いなに化けて来たそうだとすつと、そいつ持^たつて、骨董屋さんが寺さ行つて、

「和尚さん、和尚さん、まず古いものの珍しいもの見つけて来たから、これ買ってもらいたい」

て、出したそうだと。そうすつと和尚さんは、

「なるほど、これ、珍しい釜だから、ほんじゃ買つてやる。格好もいいし、買つてやる」

そうすつと、和尚さんどき売つて、そして骨董屋さんは帰つて来たど。家さ。

そうすつど和尚さま、

「小僧、小僧、釜砥ぎできれいに洗ってこい、お茶を立てて飲むから…」

そうすつど、「はい」て小僧流しき行つて一生懸命でこすつたそう。タワシで、
そしたら、

「小僧、小僧、そつと砥げ小僧」

とかて、

「痛いから、そつと砥げ小僧」

そうすつど、

「和尚さま、和尚さま、この釜、何だか音立てる」

「金のええ釜だから、タワシ当てれば、音あするかねごと」

て、和尚さまは勝手にいて来なかつた。そしたら、また小僧あまず一生懸命
でタワシでこすつた。

「小僧、小僧、痛いから、そつと砥げ小僧、そつと砥げ小僧」

て言う。

『そつと砥げ小僧』 って言うぜ」

「茶釜喋つことないから、タワシの金でも当ったごで」

て、和尚さま言うたど。そしてまず水をついで来て、掛けたそうだと。そうしたら、段々に炭おきて、お湯チンチン沸いて来る。熱くなったから、こんど窓破つて行つたそうだと。そうすつと和尚さま怒つて、――和田文兵衛という人であつたとな、その骨董屋は――その骨董屋さ行つて、

「いやいや、お前から買った釜は狐が化けたなであつた。狐になつて窓破つて出で行つた」

そうすつと、骨董屋は膝かぶさ、コウヤクを大きく貼つて、小豆の水をとつて中さ何じなよか仕掛けて、そして、

「いやいや、おれではない。おれではない。腫れものあ出て、この間はどこさも出来ないんだ。この通りで腫れて、この通りだ」

て見せたそうだと。そしてまず、

「うんでウミも出るようになった。おれでは決してない、やっぱり狐と狐の仕業

だべ」

こう言うたごんだど。そして和尚さんも仕様なくて、帰って来たどな。そしてらこんどまず和尚さん負けたなてはあ。骨董屋にお金ばり取らつじやごではあ。

それからまた、こんど狐のいた野原さ行つてみたら、狐の穴あつたど。そこさ狐の小さいな、いっぱい遊んでいた。

「狐、狐、おれあお土産買つて来たから、饅頭買つてきたから、食え」

そして、狐もらつて喜んで食べつどすつど、中で親狐あ、

「お前がた、和田文兵衛の買つてきた饅頭など、石でも拾つて来たか、土でも丸めて来たか分んねから、決して食べんな」

て、中でおつか狐教えたど。

「いやいや、決して、今日のなわ、あやしいもんでないから、食べられる饅頭だから」

て、そしてまず、饅頭を食わせて、そのうちにまず、また中から親狐あ出はつて来たど……。

29 猿

聲

むかし、あるところに、じいさんがばあさんといで、山さじいさんは火野^{かの}うな
いに行つてな、そして一人言語^おつたど。年寄りでこわいから、

「この火野^{かの}うなつて呉^かつじや人あつたら、娘三人持ったから、どれか一人呉れる」
て言うたどな。そしたら、

「おれうなつて呉れっから、ほんじや娘呉ろ」
て、山から若い男降^おちて来て、そうすつど、

「ほんじや、うなつてもらうか」

て、うなつてもらつたそうだ。そしたらこんどあ、家さ歸つて来て考えてみた
げんども、三人の娘で、山さ嫁さ行くのあ、いないごんだどな。そしてはあ、思

案して朝に起きんなねげんだな、そしたら、

「昨日、あまり暑い時、火野うないに行つて、頭痛くて」

て、御飯食べらんねから起きながつたど。

「おれの言うこと聞いて呉れつか」

「何でも何でも聞つから語つて呉ろ」

て言つて、語つたそうだ。そしたら、

「おれあ、昨日あまりこわいから、その火野うなつて呉つじや人あつたら、娘三人もつたから、一人呉れるて言うた。そしたら、『おれうなつて呉れつから、その娘呉ろ』て言わつて、呉れることにした、おまえ山さ嫁に行つてもらわんねが」
「いい。このじつちや、そがなもんだらば、鬼だか蛇だか分んねがんべ、そがなどこさ嫁に行かんね」

て、一番娘に逃げらつじやごんだど。こんど二番の娘、

「じいちゃん、じいちゃん、起きて御飯あがれ」

「御飯食たくないげんども、おれ言うこと聞いて呉れつか」

「何だか語ってみろ」

語ったら、

「昨日、あまり暑いとき、火野うないしかったから、『この火野うなつて呉っじや人あつたら、娘三人持った一人呉れる』て言うたら、『おれうなつて呉れっから』て、山から若い男降りてきて、一ぺんにうなつて呉っじや。お前行つてもらわんねが、嫁に」

て言うたら、

「そがえなもの、何だか、山から来る者など分んねがら、おれはあ、行かんねがら……」

て言うて、これもやめてもどつて来らつたど。こんど三番目の小さい娘、

「じっちや、じっちや、起きて御飯あがれ」

て言うたら、

「御飯も食いたいげんども、お前、おれ言うこと聞いて呉れっか」

「なんでもええから、じっちやの言うことなど、何でも聞くから教えて呉ろ」

て言うたそうだ。ちゃんと。そうすつど、

「おれ、あまり、昨日、火野うないに行つて、暑くてこわくて、休んでいたれば『この火野うなつて呉つじや人あつたら、娘三人もつた一人呉れる』て言うた。そしたら山から若い男降ちて来てはあ、『ほんじゃ、おれ、うなつて呉れっからおれに呉れろ』て呉れてやる分にして来た。お前行つてもらわんねが」

て言うたど。そしたら、

「ええどこでない、どさかしら嫁に行かんねから、じつちやの言うごんだも、ええどこでない」

て、小さい娘あ引受けたど。そして、

「明日来ることに約束してきたから、明日来るから」

そして待ちつたら降りて来たそうだ。山から、

「じつちや、じつちや、おれと昨日相談したな、どの娘だ」

て。そしたら、

「この娘だから、連れでつて、めんどどうして呉る」

て、こう言うて、そして娘も、

「ええどこでない」

て、着物を着換えて山さ行つたど。そして行つて、まず暮していると、春になつて、こんどはお節供だかな、三月だかになつて、

「里さ、里帰りに行んから、何お土産背負つたらええがんべ」
そうすつど、

「餅、おらえのじつちや、餅好きな人だから餅だらええがんべ」

「ほんじゃ、餅搗いて、重箱さ入つで…」

「重箱など入つで…おらえのじいちや、重箱嫌い、ウルシ嫌いな人で、重箱くさいて上^あがやんねから…」

「ほんじゃ、鍋で背負うか」

て言うたそうだ。

「いや、鍋など背負つたて、鍋くさいて上^あがやんね人だから…」

「ほんじゃ、おれ、臼背負つて行く」

て、そして、

「臼だらはあ、搗いたもんだべし、よかんべ」

こんど臼背負うことになった。そしたら臼背負って出かけて、山から下がってそして山の道をずうっと下がって来るうちに、こう大きな川あって、川さこう下がって、桜の花咲いでた。

「いやいや、あの花の美しいことなあ、あれなど取ってって見せたら、なんぼおらえのじつちや喜ぶか」

て言うたそうだ。そうすつど、

「あまりええ、ほんじやおれ、押折おしよってくる。ここさ臼降ろして……」

「いやいや、臼土さ降ろしたら、土くさくなつて上あがやんねから、臼はあ降ろしてもらわんね」

て言うたらば、

「んじやらば、臼背負つて上がる」

て、背負つて上がったそうだ。そうすつど、「この枝ええか」て言うたば、

「その枝は花好ましいげんど、もう少し裏の方に、好ましい花咲いっだから、それだらええがんべ」

て。そうすつど、臼背負つて、こう手伸ばたわけだ。そうすつど桜はやっぱりサコイ木で、ポツンと折れたど。そうすつどはあ、臼からみまぐつで行ったど。そしたらその下の川さ落ちたど。そしてはあ、川から臼背負ったまんま、ズボコズボコ流つて行つたど。そうすつど、

「いやいや、早く上がってござれ、綱もないんだし…」

て、娘はうんと騒いだげんど、何も探ねつけらんね、そのうちにはあ、ズボコズボコと流つて、そんどき唄詠んだど。

猿川に流るる生命はおしまねど

あつたる娘後家にするらん

という唄詠んだど。そしたらはあ、娘も仕様ないから、こんど家さ帰つて来たわけだ。

「いやいや、戻つて来たことか」

て、家内の衆はみな喜んで、

「桜の花をお土産に取ってくつかと思つて、取つてもらうべと思つたら、木が折れてはあ、川さ流つてしまつたから、帰つて来たどこだはあ」

て、一人で帰つて来たど。んだからやつぱり賢い人には敵わねて、むかしから言うたもんだと。とーびつたり。

(男鹿てつの)

30 猿

聾

三人娘持つてで、前千刈、後千刈の大きな百姓だげんども、水掛んねで困つてだどこな、それさ、猿、

「そんな簡単なことない、おれあこの娘呉れっこんだらば、おれ、一晚に水掛けて呉れる」

て言うたど。そして、

「ええどこでない。娘などどれでもええから呉れっから、水掛けて呉ろ」

て言うたら、次の朝げ、後前全部水かかつてる。そうすつど猿が迎えに来たわけだ。そんな時のごんだべ。そうしたら困ったじいさんが、朝げ起きないど。

「なんだ、じいさん、御飯だから起きろ」て。

「こういうごんだ。お前、猿の嫁になつて行つてくれっか」

て言うたらば、

「そんなこと嫌だ」

て。こんど二番目な起しに来たから、そう言うたら、それも嫌^やんだて言うんだし、

「いま一人では困ったごんだ」

て思つていたらば、

「あまりええ、おれあ行んから、ほがえにがっかりしていねで、おじいちゃん起きて御飯食べろ」

て言うたど。そして喜んで、猿の嫁になって猿と一緒に行ったどこだど。そして嫁に行つて里歸りに、向うに餅搗いておじいさんどこに持つてくるごんだべ。そしたら、

「何さ、どんなこととして持つて行つたらええ」
て言うたらば、

「そんなものさ入れつど、重箱さ入れれば、それ嫌いだし、こういう風にしても嫌いだ」

そうすつど、困り果てて、

「ほんでは、臼がらみ背負わんなね」

どっこい、こんな大きな臼がらみ背負つたわけだ。そしておじいさんどこさ、背負つてきて、途中で考えたには、娘が、

「川端にきれいな藤の花が下がっていたから、あれ欲しいなあ」

て言うたら、

「それ、ほんじゃまず、ここさ降ろして、藤の花取つて呉^けつから、待つてろ」

て、こういうわけだどな、猿が…。

「いやいや、それ降さんね、それおろすど土くさくて食んねて言うぞ」

て言うわけだ。んだから、そうすつど仕方なしに猿が背負ったまんま、猿のござだから登って行つた。そして「これ、ええか」ていうど「いやいや、その向うんな、その上の、こう下がったなええ」て、その上だの、そして行くど、

「その下つたどこのええ、それ取つて呉ろ」

て言うたべ。そうすつどよくよくのあれなもんだから、木が折れて、なんぼ藤だつてな、それに重いんだし、ドツタリと川さ落ちたど。

娘は、そしてじいさんどこさ逃げて行つたど。そしてじいさんに褒めらつただけど。とーびんびつたり。

(男鹿 秀)

31 蛇

聒

むかしあつたけど。

地主になあ、後千刈、前さ千刈、田持つてでよ、それ干魃で毎日の日であり、田さ口開いて、ほんとに実んねほど田が干^ひつて困った時、そのじさまが、じじとばが間に三人の女子ども持^{おなこ}つてで…。

「誰か一人、子ども呉れっから、雨降らせてもらいたい」

て念じたところだけな。そしたら、後に大きな沼あつて、沼に大蛇がいて、それが聞きつけて、にわかにも雨を降らせたけど。そういう風に思いがかなつたもんだから、じさまが寝^ねつたどこさ、言うには言うたものの、承知してもらえんだか、それあ疑問だべ。娘にな…。「大蛇のおかたになれ」なんてな。じじも屈託してはあ、大ごしたもんだと思つてはあ、そがなことおれは念じて、本当に雨降つて来たもんだし、後の沼から、大蛇いて、それに降らせてもらったということは自分で分つてあつたんだな。そして朝げに「御飯だ」て起しに行った時、

「おれ、こういうごんで、娘三人持ってたから、どれか一人雨降らせた人に進ぜつから、降らせてもらいたいと念じたれば、こういう雨が降ったんだ。んだからお前誰だ言うたら、後の沼に大蛇が住んでて、そいつが降らせて呉っじやがら、お前、そいつのおかたになつて呉んねか」

どかて頼んだ。そしたら、

「馬鹿なこと語って、大蛇のおかたになられんめえちやえ」

て言うて、一番大きい姉さが言うたぞこだけな。二番目の娘、そして行つて起したれば、じさまがそう言うて頼んだげんども、承知しないぞこだけ。そして三番目の娘が行つて同じこと語って、じさまが頼んだれば、

「そがなことで、おれは親のことでもあるし、あまりええどこでないから、おらの望みも聞いて呉ろ」

て言うごんだけど。

「どんなごんだか、おれあ出る限りのことすつから、お前、大蛇のおかたになつて行つて呉ろ」

て言うたら、

「そがなめんどうなことでないから、針を千本買って呉ろ、針を千本とフクベン千買って呉ろ」

て。「そんなことはそうだけれど」て、じさまもあちこち探して、求めたわけだ。そして求めて、

「何、タンスもいらね、何にもいらね、着物もいらね」

て、それを求めて呉っじやどこだけな。そしてその自分の望みのもの求めてもらったもんだから、嘘いつわりですまねもんだから、そこさ行ったわけだ。沼さ、青々という沼さな。その娘も度胸ええごでな。そして行ったら、向うの岸から神楽のような頭の大蛇出はってきたわけだ。そしてこういうわけだって、次第を話したら、

「よく来て呉っじや」

て、して、

「おれあお前のおかたになっから、おれの言うのも聞いてもらいたいから…」

て言うごんで、沼さフクベン千と針千本、浮かしたわけだ。そうすつど、ガホと手でかき廻すじど、身成内さ針が刺さる。

「このフクベン沈ませて呉る」

て、娘頼んだわけだ。そうすつどやつぱりフクベン沈ませっだいから、手でかき廻すじど、針浮かしたもんだから、針、身成内さ刺さったわけだ。千本の針だから、大蛇だったて、身成内さ刺されば弱るわけだ。そこあ賢いところで、肝要なことだごで。むかしとーびったり。

(後藤とよ)

32 蛙 女 房

むかし、あるところに一人ぼっちあいて、嫁もとんねで一人で暮していたどこさ、雨降りの夕方訪れて、ピチャピチャ、ピチャピチャと足音のあるな、と思っ

たら、女の人あ、

「今夜一晩げ泊めておくやい。道に迷って、どきも行きようない」

「御飯もないげんども、炊いて食べられっこんだら寄れ」

て言わつで、寄つてみて、まめに、その家さ泊つて朝げには早く起きて、御飯炊く、洗濯はする、て、いるうちに、

「嫁にして呉んねがはあ」

て言わつで、嫁にしたどこだど。そして嫁にしていだったら、何だか不思議なところあるんだし、ある日その嫁言うには、

「兄さん、兄さん、今日はおらえのおとうさんが死んで、四十九日で四十九縁のお法事あるもんで、そこさ招待さつだから、そこさ行つて来つから、暇呉つじえくろ」

て言わつで、

「ええどこでないから、行つてこい」

ては言つたものの、どつから来たものやら、家元の親の四十九縁なて、どうい

うものか、

「よし、見はらかして呉れましょう」

て、嫁について行つたど。だんだん見えつ隠れつ付いて行つたら、やっぱり山の中のとんでもない山の中なもんだなあと思つて行つたら、一つの大沼あつて、そしてあつちこち眺めているうちに、着物ストンと脱いだら蛙になつてしまつたのよ。ジャボーツと沼さ入つて行つて、

「いやいや、叔母御^おあ来て呉つじやでこら、今和尚さまござつて拝むどこだ」
て、お法事、沼の中でしたごんだ。そのうち、和尚さまて言うど、赤蛙の大
きな来て、

「いや、遅れて来たどこだ」

て、一統だな、入つて来て、「さあお経詠んでおくやれ」て言うど、

カエコカエコカエコ

カナツボ オ日ニ照ラレテ

アツガテ カツガテ

ショウコウ リンリン

て唱えたど。それ見て一人ぼっちは怒って、

「一人ぼっちだって、馬鹿にしてけつかる、蛙まで人を馬鹿にして、おかたにな
のなつてけつかる、この分では許しておかんね」

て、そこに枯棒杭あんのので、沼さドサンと叩きつけたらば、ピターツと、その
蛙の鳴声がなくなる。

「よし、こんで敵討った。よし、来たら風呂沸かして、茹で殺して呉れましょう」
て思つて、戻つてきて、こじらね振りして風呂沸かしていたけあ、

「いやいや、遅くなつた。いやいや、今日まず大変なこと出て、和尚さま拝んで
だ最中に梁あ落ちてきて、和尚さまの眉間さ傷あついて大騒ぎであつた」

て来た。こん畜生と思つて、まず、

「何ぼか疲れてあつたべと思つて、お風呂沸かしたから、入つてみゃんねが」

「お風呂、あんまり好きでないから、入いつじやぐない」

「そんなこと言わねで入れ、せつかく沸したの、どうでもせえね」

ていうもんで、ビリビリ嫌んだがるの裸にして入っで、どんどん火焚いて、蓋かけて、そして開けてみたれば、青い蛙はブクブクと浮きっただけ。一人ぼっちでは居るもんでないけど。むかしとーびったり。

(山口ふみ)

33 鮭のよ女房

吉おんつあどき、暗くなるしまに、きれいな女あ、

「今夜一晩げ、泊めておくやい」

て来たけど。そうすつど、

「おらが、一人食うもんで、何も食うものも持たないし、泊めらんね」

て言うたげんども、

「ええから一晩げだけ泊めて呉ろ」

て言うもんで、

「ほだらええから泊れ」

て、泊めたど。そしたらええ女あ、

「朝げに、おれあ御飯炊きすつから…」

て、次の朝げに飯炊きすつど、大そううまいハラコ汁して呉つだど。そんでそうしているうちにはあ、一晚げばりでなどなくなつてはあ、三つも四つも泊つたどはあ。そしてこんどは、

「おれどこ、おかたにして呉ろ」

て言うけどはあ。

「ほんじゃ、よかんべ」

て言うもんで、嫁にもらつて、そうすつど毎日、毎日、何にも持つてもこないで、ハラコ汁ばりしてくれる。

「なんだて、これは異いなもんだと思って、気あついて、何とかして見明あかしてくれんべ」

て思つて、隠つて見でつずげんど、やっぱりそういうときは、悟つてはあ、見せねもんだけどはあ。それからこんど、

「おれあ用事あつけ、買物に行つて来つからて、出はつて、そして二階の上さあがつて見つど、こんどおかた起きて、飯炊いて、お汁煮るていう時、衣裳着つたな、グラリ尻ひつたぐつて、播鉢の中さ尻突つこんで、ハラコ産したど。そしてはあ、そいつハラコ汁だつてはあ、鍋さ入つで煮て食せ食せさつだどこだど。そうしつどはあ、おんつあも二階から降つて来てはあ、そして「飯食いやれ」て言うけあ、

「何だか、今日は異なもの見たれば、胸わるくて食んね」
て、飯食ながつたどな。

「ほんじゃ、おれ見はらかさつじやなだから、仕方ない」
て言うけざあ、ええ女あ、大きな雑魚になつて、水舟からガホガホ、ガホガホと川さ逃げて行つたど。とーびつたり。

(山口すえの)

34 魚 女 房

浜の近くに、一人で漁師してある人さ、魚化けて来た。そして雨降る時来て、

「泊めてもらいたい」

そして泊めたら、いつまでもよつても帰って行かない。そうすつど、

「お嫁にしてもらいたい」

て言わつたど。そしてお嫁にしているうちに、御飯炊いて、お汁煮^{つけ}つずだな。

そうすつど毎日、ハラコてなあ、鮭から取る、あいつを煮て食せらつじやど。

「なえだて、不思議なもんだ」

て、山さ稼ぎに行くふりして、その物置きの二階さ上がった見つた。そしたらそのお汁を搗つて鍋さ、ちゃんと股はつてな、ハラコを出して、腹から、そして煮てくれるど。そしたら気味悪くてお嫁にしておかなくなつて、そして話したそうだな。そしたら、

「おれは、こういう鮭の化けたのだから、こうすつど、こういうあんばいに化け

んなねもんで化けて、お嫁に來たなだから、悪かったから、堪忍してくろ」
て謝まつて、雑魚になつて、裏の池さ入つて泳いで行つたど。とーびん。

(男鹿てつの)

35 魚 女 房

ある、ここのようなところに、一軒屋があつたけど。そこにおかたも持たねで、
一人ぼっちで暮している人があつたど。

そしてその人が大きな鱒とつて來たけど、子どもがよ…、その鱒とつて、來た
な、

「お前だ、お前だ、そがえな雑魚とつて、そして殺して、むごさいごんだから、
殺さねで。おれ、錢呉つから、おれにその、売つて呉ろ」

てな、そして子どものごんだから、「あまりええ」て、そして錢やつて、雑魚鱒

もらつて、

「お前なあ、殺されつどこだけぜはあ、子ども衆に。早くこの川さ入つて泳いで行けよ」

て、ザブンと川さ投げ込んだつてなあ。そうすつど、鱒は喜んで、ヨナヨナ、ヨナヨナと行つたつてよ。そして家さと歸つてきて、一人ぼつちなもんだから毎日稼ぎに行つて来てはあ、一人で飯炊まきいて食つてな、いたところが、ある日、きれいな娘が来たけど。

「おれ、道に迷つてはあ、こげなとこさ来てしまつたどこだ」
て来たけど。そして、

「泊めておくやい、今夜一晚泊めておくやい」

「あまりええげんど、おれ一人ぼつちだで、おれ一人子だぜ、泊んなのええげんども、ええか」

「あまりええ、なんとも仕様ないから、暗くなつて行かんねから泊めておくやい」
て。そしたばきれいな娘、泊めて、次の日になつたげんども行かね、歸つて行

かねで、そして御飯を炊いて呉くつでよ、きれいに家の中を掃除してはあ、そして次の日になつど、帰んねでまたその次の日になつても、まだ帰んね。そして御飯を炊いて、うまいお汁つげなど煮て、ちゃんと待ちてで呉くつで、泊とつてで呉くれるものだから、

「お前行くんだ」

ても言わんねんだからな、かまわず泊めておいた。そして、

「何だて、奇態なもんだな、こりや、何とかして見はらかして呉くんなね」

て思つてよ。そしてある日、仕事から早い加減に帰つてきて、まず家の後さ隠ひそつで、夕方、御飯炊きすつどき、そつと覗のぞつて見つだど。そしたれば鱒ますになつて、お汁つげ、カエロカエロ、カエロカエロとすつて、お汁鍋さ鱒ますになつて入つて、身成りをきれいにコチヨコチヨと洗つて、そして上がつて、また着物きてちゃんとした。そして鱒入ますいれつてしたから、お汁がうまいんだべ。そして、

「はあ、これあなあ、鱒ますであつた。先度おれあ、子どもから買つて放したけなあ、助けたけあ、あの鱒ますだな」

て思つて、そしてまず、親父さま黙つて飯食つていただけあ、次の日になつたれば、「おれ、見つけらっじゃなあ」

て思つてな、胸の仏が知れたか、暇乞いして行つたつて。

「永々お世話になつて、おしようにござり申した」

て、帰つて行つたど。んだから何でも殺さないで、助けるもんだ。お前もそういう風にしなねぞな。むかしとーびつたり。

(佃 する)

36 鶴 女 房

雨降りの晩に、泊めて呉^けろて来て、女の人が……。そして泊めだつてな。そしておじいさんのいたどこさ来て、先におじいさんが鶴を助けたわけだな。そしていろいろ女の人いねもんだから、炊事の方などやってくれて喜んでいたわけだべ。

そうすつどこんど、機織りするつて、機織つて呉れたど。きれいな機を織つて、そして喜んでいたとこあ、

「どんなことして、あんなきれいなハタ、何も材料もないのに織るもんだ」

と思つて、おじいさんがソオツと見たらば、鶴が自分の毛をパッパツと取つてそしてそさ織り込むどこ見つけたごんだ。そして、見つけらつだもんだから、見つけらつじやなんと言わながつたげんど、ちゃんと悟つて、そしてはあ、

「おれはいらんねから帰る」

て、そして帰つて行つたつてな。とーびん。

(男鹿せん)

37 天人女房

むかしあつたけど。

あるどこに漁師いて、漁したどこさ、天から大したきれいな羽衣着った衆あ来て、水浴びしたもんだから、その羽衣一つ隠したごんだな。そうしてはあ、天女上^あがらんねもんだから、いたどこさ行つて、

「おら家さあえべ」

て言うて、その家の嫁にしてはあ、子ども出て、そして子どもが泣くじど、旦那は子どもさ羽衣隠したな見せて、だましだましして、

「決して、おっかさ言うなよ」

ていた風だけな。そして泣くど。その旦那、羽衣もって行つて見せる。

ある日、その旦那の留守の、どさか行つた後に、その子どもだまして、そして羽衣きて、そして、

「おれどさ会いに来たいときには、この朝顔の種子置つから、朝顔蒔いて、長い

手立てて、そして登って来い」

て言わっで、そしておかあさんが、その羽衣見つけて、出して着て行つたところだけな。そしてらば、上からおかあさんが手出して、

「いまちいと、いまちいと」

て言うて、子どもばりヒヨイと取つて行つてはあ、子どもばり育てたけど。とーびつたり。

(大石きみよ)

38 桃 太 郎

むかしあつたけど。ここのようなどこに、じじとばばいたけど。そしてじじは山さ柴刈りに、ばばは川さ洗濯に行ったけど。

そして一生懸命に洗濯したれば、川上の方から、赤い桃と青い桃と流つて来

たけど。

「赤い桃、こっちやこい、青い桃そっちや行げ」

て、カップポカップ、カップポカップと。ばば、したれば赤い桃あpunkpunk、punkpunkと、こっちや来たけじし、青い桃あアンアンで泣き泣き、そっちや流って行つたけど。そしてはあ、ばば拾ってきてはあ、家さ持つて来てしまつて置いて、

「晚げ、じじあ帰つてきたらば、分けて食うべあ」

て戸棚さ入つてしまつてで、そしたればじじは山からいっぱい柴背負つて帰つてきたれば、

「じじ、じじ、おれ今日洗濯に行つたれば、赤い桃拾つて来たぜ、晚げ分けて食うべなあ」

「ええがんべなあ、ほんじゃ、夜わり終してから食うべなあ」

て、そして夜わり終してから俎板と庖丁もつてきて、俎板の上さあけて、パカーッと割つたれば、中からめんこい男のおぼこあ、オギヤーて生まつただけど。

桃から生っだから桃太郎と名付けろはあて、桃太郎と名付けたど。そうして、それめんごがって、赤い御飯炊いて赤い魚買ととつてはあ、いっぱい食せてはあ、大きくなつたけど。そして桃太郎、桃太郎てめんごがって、じじとばば、おがして、大きくなつたれば、

「おれあ、じじ、じじ、鬼ガ島さ鬼退治に行つてくるから、キビダンゴ拵えて呉ろ」

て言うたけど。ばば一生懸命でキビダンゴを、トンカパンカ、トンカパンカと臼ではたいて、そして粉拵えて、いっぱいうまく丸めて呉つて、それを袋さ入つて、腰さ下げて、そして鬼ガ島さ出かけたけど。

だんだん行つたれば、向うの方から犬あワンワン、ワンワンて来てはあ、桃太郎の前さチョコンと来てはあ、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさござる」

「おれは鬼ガ島さ、鬼退治に行く」

「おれもお伴をしつから、お腰さ下げつたもの何でござる」

「これは日本一のキビダンゴ、一つ食べばうまいもの、二つ食べば苦いもの、三つ食べば辛いもの」

「ほんでは、わたしに一つ下さい。お伴すっから」

「んだら、一つあげっから」

て、もらって食ったれば、いやそのうまいこと、うまいこと。

また、だんだん行ったれば、こんどは向うから、猿、キャンキャン、キャンキャンて来たけど。

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさござる」

「おれは鬼ガ島さ、鬼退治に行く」

「お腰に下げたもの、何でござる」

「日本一のキビダンゴ、一つ食べばうまいもの、二つ食べば苦いもの、三つ食べば辛いもの」

「一つ下さい。お伴しっから」

そして、一つもらって食って、うまいことうまいこと、まず、そしてだんだん

と行つたれば、大きな門作つてはあ、あつたけど。そこに錠かかつていたもんだから、開けらんねから、キジの鳥あぶーんと飛んで行つて、陰さ行つて、錠あけて、そしたら青鬼に赤鬼いたけど。そうすつど桃太郎、恐れないで、なんぼ荒いんもんだか、

「お前の首をもらいに來た。首をもらいに來たところから、尋常に勝負しつから首をもらつて行かんね」

「桃太郎さん、桃太郎さん、生命ばり助けておくやい。何でもええもの、宝物いっぱいあげ申すから、生命ばりは助けて呉ろ」

て言うてはあ、

「ほんじゃら、宝物、みな出せ」

そうすつどいっぱい、サンゴだ、打出の小槌だ、金銀サンゴ綾錦いっぱい車一つ積んで、そしてはあ、鬼退治してはあ、キジは綱率いて、犬は車を引張つて、お猿は後押しして、帰つてきたど。そうすつど、じじとばば喜んで、家の前さ出て待ちてて、そして、

「じじ、じじ、今帰ってきた」「桃太郎、あらいな」
て、うんと喜ばっじゃけど。むかしとーびったり。

(佃 する)

39 桃 太 郎

じっちゃとばっちやいたけど。じじは山さ柴刈りに、ばばは洗濯に行ったけど。
そして洗濯したれば、大きな桃はプンクプンクと流ってきたんだど。そしてそ
の桃をばっちやが拾って家さ持ってきて置いたれば、そのうちにじじ戻ってきて、
「桃拾って来たべ」
なて言うど、

「ほんじゃ、割って食うべな」
て、いたどき、俎板と庖丁と持ってきて、割る気になったれば、その中から子

ども生^{うま}つで来たど。喜んで、じじとばば、本氣になつて、それをめんごがつて、いろいろなもの拵^もつて食せだつて。そしたれば、見るみるうちに大きくなつてはあ、こんど名前は桃太郎とつけて、鬼退治に行きたいな。そしてばばもじじもやうだくなくて言うだげんども、行きたい行きたい言うもんだから、ばば、キビダング拵^もえて、そして袋さ入れてあずけたど。そうすつど、持つて桃太郎あ出かけた。したれば猿がきて、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさ行くなだ」

「鬼退治に行くなだ」

て言うたば、

「おれさ一つ呉ろ、そうすつどおれもついて行んから…」

て言うもんで、一つ呉つじやんだど。そしてそれをもらつて一緒について行つて、もう少し行つたば、犬あ来た。犬もやつぱりそう言つて、キビダングもらつて食つてはあ、また行つたつて。してまた、ずうつと行くと、キジがまた来て、キジもキビダングもらつて、食つて、そしてそれも従^ついて行つた。猿に犬にキジ

に。

そして鬼ガ島に行ってみたら、大きな鬼いっぱいいて、桃太郎が鬼を征伐して、とってしまった。そこで、宝物いっぱい出して、降参して、桃太郎に呉^くで、「敗けたからはあ、許して呉^くろ」言^いって、そして宝物出したんだど。そしてそれをもらって、山ほど積んで引いて家さ戻^{かへ}ってきて、じじとばばどこあ、立派に大切にして暮^くさせたんだど。とーぴったり。

(高橋うめの)

40 桃 太 郎

むかしあつたど。

あるところに、おじいさんとおばあさんがいたけど。おじいさんは山さ柴^{しば}伐りに、おばあさんは川さ洗濯^{せんたく}に行^いったど。そうしておばあさんが洗濯^{せんたく}したらば、

川上の方から大きな赤い桃と青い桃と流つて来て、おばあさんは、

赤い桃、こっちやこい

青い桃、そっちや行げ

て言うたれば、赤い桃はだんだんおばあさんの方さ寄つて来たじし、青い桃は泣き泣き流つて行つたけど。そしておばあさんは、まずヒヨコヒヨコと大きな桃持^たつてきて、お仏さまさ上げて置くべて、上げておいたらば、晩方なつたれば、おじいさんは、

「いやいや、まず、こわがつた」

なて、山から柴伐背負つて来た。

「おじいさん、おじいさん、今日洗濯さ行つて、大きな桃拾つてきて、おじいさんが来たら食うべと思つて、お仏さまさ上げたぜ」

て言うて、

「ほんじゃ、飯食^{まんま}つてから食うから……」

ていたら、そのうち何だかバチンと割れる音したれば、「オギヤオギア、オギア」

なていう音して、

「なんだ、おじいさん、赤ん坊の泣く音すんぜ」

て行ってみたれば、大した丸々とした真赤な顔した赤ん坊生れていた。

「いやいや、おじいさん、まずまず、赤ん坊生つでいた」

して、

「桃から生れたから、桃太郎と名付んべ」

て、桃太郎と名付けて、いや、食うにも飲むにも、メキメキメキと大きくなつただけな。そして、おじいさんが木割つてれば、木割り、おばあさんが水汲んでれば、水汲み、一生懸命で手伝つて、そして子どもになったごんだど。

そしてある日、桃太郎、おじいさんとおばあさんさ、

「鬼退治に行きたい」

て言うたもんだけな。そして「鬼退治に行くには、キビダンゴというものを拵つてもらわねえ」て、そんで、ほんじゃらばキビをはたいてキビダンゴに拵つて、背負わせてやったようだけな。そしてずうつと行つたれば、山からガサガサ、ガ

サガサて来たの何だと思つて見たらば、犬、

「桃太郎さん、桃太郎さん、腰に下げたものは何だ」

て聞いたようだけな。

「日本一のキビダンゴというもんだ」

「ほんじゃ、一つおれに呉れねが」

「呉れるあええげんども、一つ食べばうまいもの、二つ食べばにがいもの。んだから一つしか呉れらんね」

一つもらつて、

「おれも、鬼退治にお伴すつから……」

て、行つたようだけど。そして犬を連れて、そうして行つたば、またワサワサ
ホイホイなて、こんど猿あ出はつてきた。そして猿も、そこで子分にしてはあ、
キビダンゴ一つ呉つでずうつと行つたらば、こんどキジ。バタバタバタと飛んで
きて、またキビダンゴを呉つじえ、そして子分にしてずうつと行つてはあ、こん
ど向い眺めたら、鬼ガ島あるもんだから、まず一番先にキジがとんで行つて、そ
むか

して突ついて門を開いたどな。そしてやつとみな入って、こんどはキジは鬼の目玉突つついたんだし、猿はかつちやく、犬は喰いつくして、みな退治してはあ、宝物いっぱい取ってはあ、そして車さつけてエンヤラヤー、エンヤラヤーとキジが綱引くエンヤラヤー、猿が後押すエンヤラヤー、犬が先引くエンヤラヤー。いっぱい宝物つんで来て、おじいさんとおばあさん喜ばせて、一生安樂に暮したけどとーびったり。

(大石きみよ)

41 瓜姫子と天邪鬼

むかし、じいちゃとばあちゃいやつてな、川さ洗濯にばつちやは行く、じつちは山さ柴刈りに。

川上から大きな瓜あ流れて、そいつをばあちゃが拾ってきて、しまっておく。

「じいさんと分けて……」て、しまっておくうちに、夜、子どもの泣く声あする。行ってみたればやっぱり瓜あ二つに分れて中から、愛らしい赤子の子あ出てきた。

「おらだ、こりや子ども持たねから、神さまのお授け」

て思つて育てていたずだな。そしたれば、大きくなつて機織りしたいて、そして機織りを機師拵つて呉れだずだな。そして機織りして、

「何好きだ」

て言うたらば、

「トコロゆでて食たい」

て言わつで山さ掘りにじいさんとばあさんが行つたずだな。したら、

「ここに、天邪鬼さあいたから、天邪鬼来たら決して戸あけんな」

て教えらつじやげんども、機織りしているうちに来たずも。「戸を開けて呉ろ」つて。「裏の畑さ桃もぎにあえべ」て。

「とても、じいさんとばあさんが厳しいから戸開けらんね。開けんなて言わつで開けらんね」

て言うたげんども、

「少し、指の入るほど開けてくろ」

そして、指の入るほど開けたら、

「少し、五本の指、みな入るほど開けて呉ろ」

「とても、そがえに開けらんね」

そして五本の指、何べんも願わつで開けたど。そしたら天邪鬼、ガラリ開けて入って来て、

「瓜姫子、裏の畑さ桃もぎに歩え^あべ」

て、連れて行がったど。そしてはあ、裏の畑で殺さつでしまつたど。そして瓜姫子に化けて、そして帰って来て、機織りしつたど。

じいさんとばあさん、山から帰ってきたら、「どうしてこんなに、機師^{はたし}の音悪が^{んべ}」

て、表で不思議立てたど。そしたらやつぱり瓜姫子に化けては、いたげんども、瓜姫子より悪いじだな。顔つきは…。そしてるうちにやつぱり天邪鬼だということこ

と分つて、そしてはあ、じいさんとばあさんが怒つて裏の畑さ連れでつて、やっぱり殺してしまつたつて。とーびんさんすけ。

(男鹿てつの)

42 瓜姫子と天邪鬼

じじとばば、瓜から生まつじや瓜姫子、大切に育てて、娘盛りになつたもんだから、機織りさせつたごんだな。そしてある日、トコロ掘りに行つて、

「トコロ好きだから掘つて来て食せつからな」

て、じじとばば、トコロ掘りに行く時、その機織りしつた娘どこさ、

「決して、天邪鬼来たとき、戸開けなよ」

て言わつて、機織りしつたどこだけな。そしたれば、そさ天邪鬼来て、

「戸開けて呉んねえか」

「じじとばばに、決して戸開けんなて言わっじやがら、戸開けらんね」

て、そうして言うて、んだげんど、天邪鬼、

「ちいと、爪の入るほど開けて呉んねえか」

て、爪の入るほど開けて呉っじやど。そして、

「いまちいと開けて呉んねえか、指の入るほど開けて呉んねえが」

て、こんど指の入るほど開けたれば、ガラッと入って来て、瓜姫子食ってしまつたど。そうしてはあ、瓜姫子食ってしまつて、骨を流し尻さ投げてはあ、自分になりすまして、そして機織りしたどさ、じじとばば、トコロいっぱい掘つて背負つてきて、茹でて呉っじやど。いつもだど毛をとったり皮をむいたりして食うの、皮もむかね、毛もとんねで食うもんだから、

「なえだ、瓜姫子、そがえして食つて」

て言うたら、

「毛は毛の薬、皮は皮の薬」

て、そしてそいつ食つた。なんだかおかしいもんだな、いつもの瓜姫子とちが

うもんだな、ていたら、やっぱり烏が教えたんだけな。

瓜姫子のハタさ

天邪鬼あのりーた のりーた

どかて、烏あ外で言うた。あんまり烏言うもんだから、そして流しさ行つてみたら、その骨殻いっぱいあつどこだけな。そして「この畜生、ほに、天邪鬼、瓜姫子殺して……」

て、殺して、うしろのカヤカブさ埋めた。そしてカヤの根元で赤いんだな、そして今でもカヤの根元は赤いなは、天邪鬼埋めらつだからだど。とーびつたり。

(大石きみよ)

43 瓜姫子と天邪鬼

むかしあつたけど。

あるところに、じじとばばがええ仲に暮してて、そして間に子どもなかったど。
ばばは洗濯に行き、じじは山さ柴刈りに行ったんだな。そして洗濯したときに、
赤い手箱と黒い手箱が流れてきて、

黒い手箱そっちゃ行け

赤い手箱こっちゃ来い

て、ばばが言うたら、赤い手箱は手前さ流つて来たど。そして蓋とつてみたら、
大きな瓜入ってで、「大そう結構なもの拾った」と思って、こんな大きな瓜拾って、
持つて、家のじさまに見せんべと思って、持つて帰つて来たんだな。

おじいさんが山から来たとき、

「今日は拍子あええて、川に洗濯に行ったら、赤い手箱流つてきたから、拾つて蓋をとったら、こんな大きな瓜が入っていたど。そして蓋とつたら、瓜が入っ

ていたから、珍しいもんだと思って、おじいさんに見せんべと思って持ってきた」

て、家さ持つて来たど。そしたら、

「そんがえな、めったにないごんだから、棚さ上げてしまつて置け」

て、二人あ棚さ上げて寝たどこだけ、どれ。そしたら夜中頃、おぼこの泣き声する。子どもの泣き声する。うんと、じじとばば、子ども欲しくつていたもんだから、起きてみれば瓜が二つに割れて、中から女の子もあ生まれつた。それを瓜姫子と名付けたど。そして毎日、蝶よ花よと育てているうちに、大そうそのおぼこがトコロ好きでな、山にトコロざああるもんだ。ツルさ出て、玉がくつっている——トコロ好きだから、おいしく食べるもんだもの、毎日絶やさず、おじいさんとおばあさんが山さ行つて掘つてきて、食べさせて、そうしているうちに、成長して、大きくなつじと、機織りさせた。そして毎日機織りして、

「また今日もトコロ掘りに行んから、天邪鬼来るからな、天邪鬼がきて、お前んどこ食べつかもしんねから、恐ろしい化物だから決して、錠かけて行んから、開

けんなよ」

て、よつく教えらっじやんだな。山さ行くときによ、じじちやとばちやに。

教えらっで気許さねで、来たたて戸など開けまいと思つていたげんども、やっぱり留守めがけて来たんだな。それ……。そして機織りしつたところに、

「瓜姫子、出はって遊べ」

て、友だちになつてな、

「んだげんども、戸開けんなつて、じじちやとばちやに教えらっじやから、開けらんね」

て言うたら、

「少し、指の入るくらいでもええから開けて呉ろ」

て、正直なもんだから、子どもなもんだから、少し開けだら、力持つてでガラガラと戸開けて入つて、むしやむしやと、その機織りしつた娘噛みつぶして、瓜姫子になつて、機織りの台さ上がつて、機織り、化けてしつたど。そしてやつぱり年寄衆はもどつて来たわけだ。山から……。そしてもどつて来て「今来た」て

言うたら、「お帰り」なて立派に言うんだし、やっぱり瓜姫子だと思って、じじとばばいたわけだ。そして茹でて食べらせたれば毛もむしんねで、ワレワレと食うわけだ。

「毛は毛の薬、皮は皮の薬」

なてはあ、食うわけだ。そんなもんだから、

「奇態な、こりや、とんでもないことになったもんだ。今まではこんなことしたことはないに……」

て、不思議に思ったわけだ。んだげんども、まさかと思って、じじとばば、悟らんねがったんだな。そして毎日同じことに機も織るんだし、してるうちに、長者原というこの立派な家からもらいに來たていうんだな。もらいに來て、ただ一人娘、そんがえに立派な家さ、育てた娘もらいに來たんだし、じじとばば呉つでやることにして、仲人に、そこから立派な簾で、簾かき尋ねてきて、御祝儀になったごんだごでな。簾さのせてギシギシと、立派にいとまごいして、一生懸命になって、じじとばば呉ってやつどき、その途中に鳥飛んできて、

瓜姫子の のりかごさ

天邪鬼あのりーた のりーた

て言うわけだど。そうすつじと、やさえないもんだから、天邪鬼は「畜生！」て追うげんど、また追かけてきては、そういう風にさやずる。そうすつじど、やっぱり天邪鬼なもんだから、

「この畜生は化けて、瓜姫子を殺して、自分が化けていたな」
て、落して、箆から落して叩いて殺してしまったわけだ。そしてカヤ野さ埋めたから、カヤの根っこざあ赤いなだど。むかしとーびったり。

（後藤とよ）

44 瓜姫子と天邪鬼

子どもの持たないじじとばば暮っていて、瓜蒔いて、瓜食うべと思って割って

みたれば、中からめんこい女の子が生まつじやと。

「瓜から生まつじやがら、瓜姫子と名付けろはあ」

て瓜姫子と名付けてはあ、とてもめんごがつて、瓜姫子、瓜姫子て、じじとばば育てて、そしてまいどの子どもなもんだから、八つ九つあたりから機織りしたもんだど。一生懸命機織った、上手なもんで、

「おれ、機織つから、ばば、ばば、糸拵えておくやい、糸うんでおくやい」

て、うんでもらつて、機織りなど上手であつたど。その瓜姫子ぎあ、トコロ好きでな、

「んで、今日、トコロ掘つて来つから、お前機織りしてで、決して戸を開けんなよ、この辺に天邪鬼ぎあいて、誰もいないとき、お前だようなどさ来て、とつて食れつから、殺されつから、決して戸開けんな、戸さえも開けねど来ねから、戸開けねで、おらだ帰つて来るまで、一人で機織りしてろよ」

て、教えて、じじとばば、山さトコロ掘りに行つた。して行つたれば、やつぱり「瓜姫子、瓜姫子」て来たてよ。そして機織りして、トントン、トントンと織つ

でだもんだから、いねふりもさんねんだし、「はい」て言うたれば、「戸開けて呉ろ」「戸開けらんね、じじとばば、決して戸開けんなよて言うて行つたもんだから、決して戸開けらんね」

「ちいと開けて呉ろ、お前どこ、ちいと見えつど、ええなだから、ちいと開けて呉ろ」

「開けらんね」

て、何べんも言うたじげんども、

「ちいとでええがら、指半分入るくらいでええから開けて呉ろ」

て、聞かないもんでな、んだから少し指も入んねぐらいだげんど、開けて呉つじやど。そうしたところあ、そつからガラリと開けて入つてきて、瓜姫子、機織つてたのを、引張り降ろして、そして殺してしまつて、自分が瓜姫子に化けて、瓜姫子の装束して、一生懸命機織りしてたときさ、じじとばば帰つて来たど。

「瓜姫子、今来た」「今か」「トコロいっぱい掘つてきたから、茹でて呉つからな」て言うて、茹でて、「ほら食え」「はい」て食つてだけざあ、ガモガモ、ガモガモ

て、皮もむかねで、常の瓜姫子だど、きれいに皮もむいて食うな、ガモガモ、ガモガモと皮むかねで、なんぼでも食うもんだど。

「おかしいな、瓜姫子、何だべな」

て、じじとばば考えてな、いたげんど、そっくりな格好は、瓜姫子なんだし、おかしいなと思ったげんども。次の日になって、そうすつじど、「瓜姫子ざあ、え娘だ」ていう評判でな、殿さまからもらいに来た。そしてもらいに来ら^くつだもんだから、「呉つでやんなね、いたましいげんど」て、いっぱい着物買って呉つで、簀で御祝儀に迎えに来たけど。どんどん、どんどんと送り出してやんべと思つて、家の前さ出はつて、簀のせんべとしたれば、きれいな鳥あとんできて、そして家の前さ、青木植えつたのさ、チョコンと停つて、

瓜姫子の　のり簀さ

天邪鬼あ　のりーた　のりーた

て鳴^なつこんだずも。そうすつど何なもんだべと最初のうちは聞き取らんねくて、
「変なこと語るもんだなあ」

て思つていたげんど、またそういう風に、何べんも言うてよ。そしてねつく聞
いてみつど、

瓜姫子の のり簞さ

天邪鬼あ のりーた のりーた

て言う。「これは変なこと言う」と思つて、何だか変な瓜姫子になったなあと思つ
ていたどこさ、そういうこと鳥が言うごんだから、見たところが、

「瓜姫子の、のり簞さ、天邪鬼あのにーた、のにーたて、あの瓜姫子、天邪鬼に
殺さつではあ、化けつだかなあ」

て思つて、「畜生、天邪鬼で、気付がったか、ほんでは見はらかして呉んなね」
て言い出したら逃げ出したつて。そして向いの山のカヤ株の中き隠つじやど。そ
してそこで叩き殺してはあ、カヤ株の中で殺してはあ、叩いたれば、血うんと出
て、そして今カヤ刈りしてみつど、根っこ赤いもんだ。それは天邪鬼が叩がつて
殺さつた血がカヤの根っこ喰付いて赤いんだど。むかしとーびつたり。

(佃 すす)

45 炭 焼 藤 太

あんまり貧乏で、嫁の来手^{きて}あなくて、川上さいっぱい米をといで、コヌカを練ったりして流して、白味噌^しにして流して、

「いやいや、大した米もある風だし……」

なて言った炭焼藤太の話

(大石きみよ)

46 さとりのお化け

むかしあつたけど。

一人者がカンジキ曲げしただこさ、狸あ化けて来て、その親父ば化かすべと思っていたど。そして囲炉裡さ当って、狸の化物あカイポ伸ばしはじめたど。

そしたらカンジキ曲げしつたな、まさか、はじけんべと思わねでいたとき、ぱあつとカンジキの木はじけたもんだから、狸の方は、そいつにはじがっで、負けたど。親父、心にもないことで狸を負かしたんだど。とーびつたり。

(大石きみよ)

47 おぶさろうの化物 — とつつくひつつく —

むかし、あるところに、大きな川があつて、三人の子どもら、夜、カジカすくいに出はつたど。そいつに、一番大きい兄^あんちや、太郎あ行つたど。そしたらよっぽど行つたら、河童^{まなぐ}あ行つたとき、大そう眼の光る化物出た。

「太郎や、おぶさっだい。太郎や、おぶさっだい」

そうすつど、恐かない、恐かないではあ、ワラワラ兄^あんじや逃げて行つた。こんど次郎は、

「そんなじゃ、おれ行つてみる」

て言うて行つた。やつぱりそこへ行つたら、眼まなこの光る大きな化物出はつて、

「次郎や、おぶさつだい。次郎や、おぶさつだい」

て。これも恐かなくて、網投げて逃げてきた。そして、一番小さい三郎あ、

「兄さんたちは弱いもんだ、ほんじゃおれあ化物おぶつてくる」

「いやいや、お前なの行つたら、化物食れるから行かんね」

て、おかちやんととうちやんが言うた。

「いやいや、おれあ、化物背負つてくる」

そして行つたら、やつぱりそこへ行つたら出てきたわけだな。そして、

「おぶさつじやいから、おぼれ」

て、背中突つ出した。そしたらその化物、川をこいで来て、背負おつたら重おだくて

重だくて、その、やつと家まで歩いてきた。そして家さ来て、

「かあちゃん、かあちゃん、化けもの背負つて来たから、早く戸を開けて呉ろ」

「化物、おぶて来た」

なて、魂消てみな戸開けながったど。

「早く、重たくて、おぶっていらんねがら、戸開けて…」

そして戸開けたら、入って来て、

「ほら、化物」

て、ドサンとおろしたら、そしたらみな黄金になって、ジャクジャク、ジャクジャクと小判になったど。荒い者にはかなわねど。とーびったり。

(男鹿てつの)

48 糠福と米福

むかしあつたけど。

糠福ざあ、おつかに死なつて、姉さは糠福、米福ざあ妹なんだ。そして糠福ざあ正直な…。やっぱり米福だたて、決して不正直なものではない、正直な立派な、

二人はええ子な者であつたげんども、親に早く別つじやんだから、まいどは「継母
のようだ」て、今とも違つてなあ、何すんにも隔てつけどもんだ。

「今日は風吹くし、二人で栗拾いに行つて来い」

なんて言わつて、そして二人は栗拾いに行つたら、昼飯持つて行つたげんども、
昼飯になんねうちに、米福などはあ、今のおっかの子どもだから、ええ袋あずけ
らうで行つたから、一つになつたわけだ。んだげんども糠福はやつぱり古い袋の
穴のあいたな持かせらつじやから、なんぼ拾つても溜んねわけだ。こう結つてな
ど見つけんども、栗あ重いから解けては落ち、解けては落ちして、

「おれあ、まだ一つになんねから、お前一つになつたら家さ帰れ。一つになんね
でお前より少し拾つて行くじど、おつかさんにまた叱られるから、お前ばり行け」
て、一人で残つて、妹をやつたわけだ。そして昼飯にもなつたし、まず御飯食
べたいと思つて、昼飯食べて、暑かつた時であつたべな、木の根っこ枕にして、
眠つたどこだつてな。眠つたら、初手のおつかさが出はつてきて、夢だかうつ
だか出はつてきて、

「お前、あんまり難儀してつから、おれ、かげながら打出の小槌ていうの持つてだから、これ呉れつから、衣裳出るとか金出るとか、欲しいときあ、これコンと叩くど何でも出つから、これ呉れつから、なんぼほど切ないときあ、これ叩いてみる」

て言わつて、ちよいつと目覚ましてみたらば、本当に、それそこにあつたけどなあ。

「いやいや、おれあ夢だと思つてあつた。本当のこんだな。本のおつかさんに行き会つたつた」

て思つて、頂いて、「袋あ出ろ」て言うたら、ちゃんと袋は出たちゆうんだ。そして袋さ一生懸命になつて拾つてはあ、一つになつたし、家さもどつて来たらおつかさんに、

「それ、そんなええ袋、どつから持つてきた」
て、こんど言われるわけだ。

「拾つて来たり、人の家から盗んで来たらなんねえぞ」

「いや、そんな事でないげんど、おれ、端切れ継ぎ仕舞ってだなて縫って、そして穴の開いっただこ、くけたのだ」

て言うどこだけな。そして何にも継母だからええぐなど解釈しねで、悪く悪くと取られるわけだぞ。そしてある時お祭りあつて、お祭りさみんな行くて言うから、「歩えべ」て友だち衆あ、お祭りさ呼ばりに来たどこだけな。そしたら、

「米福、新衣裳出して呉れっから行つてこい」

て、おっかに着物みな整えてもらつてお祭りさ行んけんども、糠福は着物も持たねから行かんねわけだ。そして、

「糠福、お前も歩えべ、おもしろい、今日、大した芝居も掛つてたという、おもしろいぜ」

て言うたれば、

「んだげんど、着物も、おれ、禄なもの持たねえし、米搗きしろて言わっじやんだから、米も搗かんね。おれ行かんね」

て言うたどこだっけ。そしたら友だち衆あ、

「米など、おらだ搗いで助け^すつから、みんなですつど雑作ないから、みんな行くどさ行がねど面白くないから、あえべ」

て誘われつどこだど。

「そんなこと言わつじやて」

て、あんまりみんなに親切に言わつで、言葉にあまえて糠福も、

「打出の小槌もらつてだな、こういう時、これ叩いたら着物も出んべから」

て思つて、そして言葉に甘えて、

「ほんじゃ、みんなそんがえ助けて呉れつこんでは、手伝つてもらつて、おれも行つてみつか」

て、そして米搗けて言うだけ搗いて、陰さ行つて、打出の小槌もらつたな叩いたら、ぞつくり着物も出たんだから、ちゃんと仕度して、みんなと一緒に、出はつたわけだ。そしてお祭りさおつかと米福は先に行つたんだし、やつぱり着物持たねから、着せねと思つていたとき、おつかお祭りさ行つてだ時見つけたわけだ。

そして、

「おつかさ、より一足先にもどつていねじど、勘定わるい」

て思つて、先に來つたんだげんど、お母さ戻つて來て、

「お前、なじよして衣裳など、あがえにええ衣裳着て、お祭りさ行つたごんだ」
て、こんど叱られるわけだ。

「友だち衆に着物も貸すし、米も搗^すいて助けっから、あえべて言わつて、薦めらつて言葉に甘えて、みんな行んからて、親切に言うて呉れるもんだし、行つて來た」
て言うたところだけ。そしたら、

「ほんじゃ、ええげんども、そんがえに着物なんか借つたりして唯ものでないんだから、このたびは仕方あんまいげんども、衣裳貸せの足袋貸せのて、いらんねんだから」

て、おつかさ言われつどこだ。「はい」て何でもおつかさの言うこと「はいはい」て聞いたどこだな。そしてこんどあ、やっぱり話じゃ早いもんで、継母にせめらつてゐるということ聞いて、大そう貞心のええ娘だという話きいて、ええどつかもらいに來て、嫁に欲しいて仲人あ來たわけだ。そしたとき、おつかさは、

「糠福のごんであんまえ、米福でないか、欲しいて来たな。糠福など衣裳も持たねもの、嫁なの行かれめちやえ」

なて、おっかさんが言うわけだ。

「いやいや、米福でない、糠福欲しい」

て言うごんだから、聞き間違えないで来たて仲人が言う。

「何も持たない裸だげんど、それでもよから連^せでつて呉ろ」

どかて、おっかさんが言うんで、いよいよ糠福は結婚式上げつどこだけな。したら打出の小槌、おっかにもらつてだなだから、仕度限り、みな整えてはあ、やつぱり簗かき衆あ来て、やつぱり嫁になつたんだな。

そして継母なもんだから、けなりぐなつたんだな。そして米福ばり残つたもんだから、それけなりと思つたんだな。

「お前も、姉は行つても、嫁にならんねんだから、簗さのらんねんだから、肥ひきゾリさでものせてみつから、のつてみる」

なて、肥ひきゾリさのせて、池のぐるり引張つたれば、種池^{たんなげ}さ落して、雪のあつ

どきだかなんだか、娘殺してしまったど。

「あんまり継母だと思つて、初手のおつかさの子どもいびつて、罰当つたんだ」
なて、本当に気味ええがつた。んだげんど、米福もむぞさいしたなあ。むかしどーびん。

(後藤とよ)

49 糠福と米福

ここのようなところに生つじや子どもが、糠福と名付けたど。そうすつじど、お母さんが死んで、後妻おつかさもらいやつたど。そうしてそこさ子ども生まつたなを、米福と名付けて、「糠福・米福」て可愛がつて、最初のうちはな、いたわけだど。そして仲よく、「姉ちや、姉ちや」といでやつたど。そしてだんだんと大きくなつてみたところあそのおつかさが、やつぱり自分のがめんごくてな、最初の

糠福のどこ、遅めんこいわけだけど。そしてはあ、

「栗拾いに行つてこい、お前だ栗拾つてこい、二人で」

「はい」

て、栗拾いに出かけて、大きな袋一つずつあずけらつてよ、そして栗山さ行つて、一生懸命に栗拾いして、姉ちゃの方、糠福がなんぼ拾つても溜んねごんだじも。そして米福なは溜つて、そして米福は、

「いっばいに袋さ、いっばいになつたぜはあ、姉ちゃ行がねがはあ」

「あい、おれな溜んねなよ、拾つたようだげんど、なんぼ拾つても、袋さ一つになんねから、おれ行がねから、お前行つてろ」

「なしてだべな、姉ちゃ、おれ拾つて助け^すっから」

て、そして拾つて助けて居つけんども、なんぼ拾つても溜んね。米福もはあ、妹あちっちゃいもんだから、

「おれ、ほんでは行つてつから、姉ちゃ、じきに来いよ」

なて、言うて行つた。姉ちゃが一生懸命に拾つて、溜んねもんだから、難儀し

て歩^あいっだべ、そして歩^あって拾^あっているうちに、大きな沼端^あさ行^あったけど。そして、大きな沼端^あさ行^あったところが、疲^あれたもんだから、そこさ尻^あついて休^あんでだところ^あが、居^あ眠^ありして眠^あってしま^あった。そしてちよいと目^あ覚^あめてみ^あたれば、その沼^あの水^ああ、ダブダブ、ダブダブとゆ^あれて来^あたげ^あんども、その娘^あ、そこ^あにいた^あれば沼^あの岸^あの方^あから、蛇^あ体^あが出^あは^あって来^あて、

「おら、家^あさ帰^あったたて、どうせ、米^あ福^あめんごがら^あつで、おれ^あめんごがらんねなだから、この蛇^あ体^あに取^あつて食^あつじやてええ。おら行^あかね、ここ^あにいる」

て、そこ^あにいた^あど。じつ^あとしていた^あところ^ああ、だ^あんだん蛇^あ体^あがき^あれ^あいにな^あつてはあ、お^あつかさんにな^あつて、そ^あして蛇^あ体^あでな^あくな^あつて、

「お^あ前^あが栗^あ拾^あいに来^あたな、栗^あ溜^あんねべ、袋^あの底^あさ孔^ああいてい^あんのだから、こ^あつちのええ袋^あ呉^あれ^あつから、こ^あいつさ一^あ杯^あ拾^あつて行^あけ。お^あれも拾^あつて助^あけ^あつから」

て、そ^あして拾^あつて助^あけら^あつではあ、袋^あ一^あつ拾^あつて、「家^あさ帰^あれよ」て。帰^あつじやぐな^あかつたげ^あんども、ま^あた蛇^あ体^あにな^あつて入^あつて行^あつたそ^あうだ。入^あつて行^あつたも^あんだから、栗^あも拾^あつた^あんだし、戻^あつて来^あた^あわけだ。そ^あして来^あたら、お^あつかさ、

「米福など、さっきだなに帰って来たのに、糠福、何してつこど。なまけて遊んでばりいて…」

て、うんとおんつあつで、そして、いつそうむごさい目にばかり会つてよ、糠福は。んだげんども我慢して勤めて、「おっかさ、おっかさ」で勤めているうちに、ええどつから貰いに来たけど。

「糠福、呉つておくやい」

「糠福でないべ、米福だべ」

てだど。おっかさはな…。

「ほんでねえ、糠福だ」

「糠福でないべ、米福だべ。間違つたでないか」

おっかさ、何べんも言うごんだど。

「いや、間違わね。糠福だから、着物など何にも持たねてもええから、身成なりばり呉つておくやい」

そして糠福はもらわつて行くことになった。そして米福はいっぱい着物など

買ってもらっては、持てだげんど、糠福は買ってもらわねで、持たねなだ。

「姉ちゃ、おれの着て行け、おれの着て行け」

て言うて、米福の一通りもらつて着て、ええどこさもらわつて行つた。

米福がもらわねもんだから、おつかさどこさ泣き泣き、たぐさつて、おつかさ、せめて米福もらわねから、仕様ないべげんど、糠福はええどこさ貰わつじやんだごて。んだから、みんな同じに育でつこんだ。そういうことするもんでない。むかしとーびつたり。

(佃 すす)

50 糠福と米福

むかしあつたけずも。

あるところに、米福と糠福という二人娘いだつけど。そしてその糠福というの

は初手のおつかの子、米福しよでんというのは今のおつかの娘で、そして隔へだてつけらつて育つていたもんだど。

ある秋ずだな。

「うしろさ、栗なつかから拾つてこい」

て言わつて、その糠福にはボロ袋、米福には新しい袋あずけて栗拾いにやつたど。そして行つたらば、姉の方は袋切つでるもんだから、なんぼ本氣になつて拾つても溜ためんね。妹の方は新しい袋などは一杯になつてはあ、

「おれあ、戻もどんぜはあ」

て言つて、姉の方は、

「おれはまだ拾わんねし、後から行んから……」

て、大きな沼あつたもんだから、大きな沼どこで泣いっだれば、向うから沼青くなり黒くなりして、向うの方から、蛇体みたいなものあ、ずつとこつちや来て、して、「恐おそつかない」て逃げつかど思つたれば、蛇、ボロボロ、ボロボロと角つのあ取つで、きれいなおつかさんになつたけど。そして、

「おれ、お前のおっかだから、逃げることあない」

て、そしてさまさま話を聞かせて、そしているうちに、その娘に、

「打出の小槌ていうもの呉れつから、欲しいもの、何あ出るポンポン、何あ出るポンポンて言うど、出つから、これ呉れつから…」

て言わつて、頭などとかしてもらっているうちに眠ってしまつて、そしてぼい
と目覺めたれば、おっか居ねもんだから、

「さっきの、夢だべかなあ」

て見たれば、その打出の小槌あるもんだから、それでまず、

「袋出ろポンポン、栗入れポンポン」

て、したれば、美しい袋さ、栗いっぱい入つたど。それ持^{たが}つて行つて、

「いやいや、大変いっぱい拾うて来たことなあ」

て。そのうちに村のお祭りあつたもんだから、そさ、おっかと妹の方あ、

「んでは、おらお祭りさ行んから、お前米搗いで、後から流し仕舞つて米搗いて
そして来い」

で言わつて、一生懸命で米搗きしつたれば、友だちあ来て、

「一緒に行かねが」

て言うもんだから、

「おれ、これこれしんなねくて行かんね」

て言うたれば、

「おらだ助^すけっから、あえべ」

て、一生懸命助^すけでもらつて、こんど部屋さ行つて、

「赤い衣裳出ろポンポン、下駄出ろポンポン」

て、いっぱい赤い衣裳からさまさま着たり履いたりして、お祭りさ行つたらば、

おつかと妹あ、向うの方で見っただけずあ、

「いやあ、大変美しい着物きつた人來つたもんだした」

なて、向うの方で姉だということ分んねで見っただけど。して、こんど早く戻つ

て来てはあ、ボロ衣裳着ていたれば、おつかと妹あ来て、

「いやいや、今日、大した美しい着物きた人あ來つたけなあ」

なて、さっぱり知しやねで言うけあ、知しやねふりしていたけど。そしてそのうちに、その娘、姉の方、糠福欲しいという仲人來た。

「糠福でなくて、米福だべ」

て、おつか言うげんども、

「いやいや、糠福欲しいなだ」

て。そして呉れっことして、そして赤い衣裳から、それこそタンス、長持からみな打出の小槌でいっぱい出して、箆さのつてもらつて行つたば、妹も、

「おらも何さかのっだい」

て言うもんで、して、おつか何かさのせて引っぱって行つたれば、拍子わるく種池さ、ズボガしてしまつて、そしてはあ大した難儀して上げて……。ほだからあまり意地の悪れことざあするもんでないけど。とーびつたり。

(大石きみよ)

51 糠福と米福

おかあさんとおとうさんざあ、糠福という娘出てな、おかあさんざあなくなつたなよ。おかあさんが逝くなつて、こんどは後妻をもらつたわけだな。米福という女の子出たなよ。そうだけれども後妻だから、糠福は可愛くないわけだ。憎くてはあ。そうしているうちに、大きなツツミのところさ行つて、糠福じゃ泣いたそうさ。そうしたらツツミの中から、先のおっかさんが出て、そしてその、

「いま少し過ぎつど、ここにお祭りあるからその時、その行く時の装束だ」

て、着物をもて来て、しまつておいて、やつぱりお祭りあつたごで。そしてお祭りさ行くとき立派な装束して糠福が一番後から、米福とおっかさんは先に、まづ出て行つたそうだな。そして立派な装束して行つたもんだからはあ、姉の糠福ざあ分んねがつたど。そうすつど大したええお嬢さまだから、殿さまは、お嫁に欲しいと言ふたど。そうすつど、

「いやいや、こいつは家の後とりだから、大きい娘。この小さい方だら呉れる」

て言うた。んだげんど殿さまは、

「大きい方もraitたい」

て、そうして、

「小さい方呉れる」

て言わつてなあ、何とも仕様なくて、歌よみしたてだな。十枚皿重ねて、その一番上のさ塩をあげて、そして松の木の枝を置いだほど。そして、

「こいつさ唄詠んだ人をお嫁にもらう」

「妹の方だか、姉の方だか」

て、そしたら姉の方あ詠んだそうだな。

バンサラヤサラ

皿十山に雪ふりて

雪を根として育つ松かな

ていう唄だな。そんで大そうええ品のある歌だて言わつて、そしてお殿さまのお嫁にもらわつたのよ。

そしたら、妹も行きたいというもんで、大そう泣いたど。そしたら、

「お前など、殿さまのお嫁などに行かんね」

どて、おつかさんに叱らつではあ、泣き泣き往生で、終えてしまったど。とー
びったり。

(男鹿てつの)

52 オサイとヨウジ — お糸唐糸 —

あるところに、おかあさんが死んで後妻もらつた家あつたど、先妻の子あオサイと名付つて、後妻の子どもはヨウジと名付つたど。そしたら後の子ども可愛いけども、先妻の子は憎くまつでなあ、いつでも着物も粗末、食べものも別であつたそうだ。んだげんども、姉思いでな、妹あ。かあちゃんが牡丹餅をして、二人に与える。そして妹と並んで食べてた。

「姉さんの餅さ、アンコいっぱいあった。姉さんのな食だい」

て言うたど。そしたら、

「お前だって、びっちり掛けつたもの、そがえに人のものは食べらんね」

そうすつど、仲よしの姉妹だから、

「ほんじゃ、一つずつ分けて食べ」

て、姉さやったけど。

「いやいや、そがえに他人のもの食べるなて言うていらんねがら、ほんじゃ二人に食せらんね」

て、かあちゃんが取つたど。そしたら、姉の方さ毒あ入っていたけど。妹の方さええな。んだから小豆をたつぷりかけて、姉に食せるつもりだったの、二人あ牡丹餅食ねでしまったど。

そしてやつぱり、時々いろいろせめらつでいて、そしてある時、軽い毒でも食せらつじやか、箱を拵って姉の方を箱さ入つて、そしてその稼ぎ人に背負わせて、

「山さもって行って埋めて来い」

てやったど。そうすつど妹は賢いから、その箱の下さ小さい孔をあけて、ケシ粒を姉に与えて、

「こいつを孔から落し落し、その山まで持って行け、そうすつどおれあ探ねて行つて、掘つからて、そう言うて、そして行つたそうだ。そして箱さ入れらつではあ、行つて山さ埋めらつじやど。こんど妹は後から行つて、ずうつと行つてみたら、ケシ粒が育つて^{おが}ずうつと生えて、そこ辿つて行つてみたら、奥山さ掘つたあとある。掘つてみたら埋まっていた。そしてその箱を出して、

「姉さん、姉さん」

て呼ばつたら、細い虫のような音であつた。それからその蓋を開けてみたら、姉さんを出して、おにぎりいっぱい持つて行つて、姉さんと分けて食つて、

「家さ帰れば、またかあちゃんにせめられる。それよりここから逃げた方ええ」

て、二人で、やっぱり山の細道通つて行つたら、部落さ出来たかな、そして部落の一番大きな家さ行つて、まず頼んでみたら、

「あまりええからおら家で使うから、姉は御飯炊き、妹は子守」

て、二人で同じ家さ入ったそうだと。そしていたら、かあちゃんとうちちゃんが子どもら案じて、あまり泣いではあ、眼あまり泣きはれではあ、二人では六部になつて、そして鉦かねを叩いて尋ねて行つたど。とうちちゃんとかあちゃん…。

「オサイとヨウジがいたならば、なんでこの鉦叩こうば…」

て、そうして鉦叩いて尋ねて行つて、そうしてその大きな家の門の前さ行つたら、聞きつけて、妹は子ども背負つて遊んでいた。そしてたら、かあちゃんとうちちゃんであつた。そして姉ちゃんを呼ばつた。したら、

「かあちゃんだか」

て。妹の方はたぐづいた。目は開かなかつたど。そうすつど、姉の方で、

「とうちちゃんか」

て、たぐづいたら、パツと目開いた。そしてたらかあちゃんがぐやしくて、モグラモチになつて這つて行つてしまつたど。とうちゃんはやつぱり坪掃除したり、畑掃除などしたり、三人で一生暮したど。いまいるモグラモチも、かあちゃんがなつたのだど。とーびつたり。

53 お糸 唐糸

お糸が、初手のおつかさの子、唐糸はちっちゃいな、なあ。そしていびらっでいたわけだべ。

おとうさんが参宮に行ったど。そしてそのおかあさんがお糸ば箱さ入れて、山さ埋めて来たど。姉さんが埋められどき、ケシ粒一つかみ入れて呉っで、そして長持の角さ穴^{かど}あけて、

「姉さん、おれ迎えに行くから、これを一粒ずつ、ずうっと落して行げ」
て、そう言うたもんだから、それがはじけたとき、それを尋ねて行ったところが、山奥さ生き埋めになつていたっけど。そしてそれを掘り出して、二人で、こんどはあ、会津さ行って暮したど。

おとうさんが参宮から帰って来て、泣いて目が見えなくなつて、

「お糸唐糸いたならば、この目がパツチリあくべぞよ」

て、会津まで探ねに行つたど。そして会津さ行つて、川で洗濯しつたどこさ行つて、

「ああ、何だか、今の音は『お糸・唐糸』って言うようだから……」

て行つたところが、おどつつあんだつて。「唐糸だよ」。そして姉さんもいた。

「おれ唐糸だ」「おれお糸だ」て、目あ片一方ずつ、ペタリペタリなめて呉つたら、目あいて、そして帰つて来たど。

(男鹿てつの)

あとがき

昭和四十五年七月以来、山形県教育委員会で、白川ダム建設に伴なう水没地区である、飯豊町中津川地区の小坂・須郷・数馬部落を中心とした「緊急民俗調査」が実施されたが、その際に担当の口承文芸の分野で聴取した昔話は、分量の都合で報告書にはその一部しか掲載できない。この地区の昔話は極めて多種に及び、語りもすぐれたものが多いので、昔話の研究に資するものが大であると信ずる。従って、昔話研究資料としてガリ版にしたが、全部で百二十話に及び、そのうち種類は六十種に及ぶが、語り口をそのままに収録したものである。この上巻には五十三話をまとめたが、分量的には約半数である。なお下巻には残りと「わらべ唄」を収録する予定である。

本稿の成立には各話者と共に、緊急民俗調査委員長の戸川安章先生はじめ、江田先生・清野先生・奥村先生・後藤先生及び県社会教育課・飯豊町中津川支所の方々の絶大な協力があつたことを記して感謝申し上げたい。なお詳細に下巻で話者・昔話について記したいと考えている。

飯豊山麓 中津川昔話集
(上)

昭和四十五年十二月二十日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二三三の三

山形短期大学民話研究センター資料叢書

飯豊山麓 中津川昔話集
(上)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十一年七月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七二年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）

- 『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）
- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』（一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』（一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『続々 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』（一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『牛方と山姥（四） 海老名ちやう昔話 第四集』（一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊）
- 『飯豊町昔話集 ― 大平・新沼・高畑 ―』（一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』（一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊）
- 『お杉お玉 小国町昔話集（一）』（一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『さとりのお化け 小国町昔話集（二）』（一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集（三）』（一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊）
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』（一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊）
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』

（一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊）

『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』（一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊）

『さるむこ 田沢の伝説と昔話』（一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊）

『ちようじやのむこ』（一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊）

『飯豊山麓 中津川昔話集（上）』（一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊）

『飯豊山麓 中津川昔話集（下）』（一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊）

『木小屋の生活 民話序説』（一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊）

『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』（一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊）

『川崎みさをさんの昔話』（一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊）